

修驗道

10

318



始



10
318



役行者尊像 (自御作)

10
318

修驗道宣揚會長三井豐興著

修驗道

東京 森江書店發兌

役行者尊形に就て

中央役優婆塞は兩部不二の眞體、不動明王の全相、八尺の長頭襟は胎藏八葉不動頂上の蓮華、右手の六輪錫杖は六趣濟度の義、左手の般若心經は世間眞空の二空を現はす。若し右手に獨股を持たはこれ斷惑證理の智劍、左手に念珠を持たはこれ大悲下化の寶索なり。口を開き玉ふ勢は阿字不生の理、法爾念誦の陀羅尼を示す。藤皮草衣は無明業盡の火焰を表はし、鐵駄は法性寂然不動不壞の磐石を表はす。右向きの像は從因至果、左向は從果向因、眞向は因果不二の義なり。若し半行半座なる時は行住座臥の四威儀即ち床堅の形儀なり。



大正
7. 11. 13
内交

左脇禪童鬼は金迦羅童子にして左手の水瓶は胎藏の悲水、其體色の青なるは悲水の色相を顯はす、又口を開くは胎藏阿字の理なり。

右脇智童鬼は制多迦童子にして右手の斧は金剛の智劍、其體色の赤なるは智火の色相を顯はす、又口を閉るは金剛吽字を示す、背に負ふ縁笈肩箱は峰中の法文祕密灌頂の庫藏なり。

左側青鬼はこれ善駄使修善の形、右側赤鬼は悪駄使斷惡の形、中央の行者は善惡不二不動法性の形なり。

序

傳教弘法の出現前吾國には既に早く役小角に依つて密教が傳へられてをる、後年修驗道となつて天下に風靡したものであれである。

然し明治維新の大變革に遭遇して修驗道は一頓挫を來して見る影もない程衰微して終つたのであるが近頃に至つて再び様々の形で頭を擡げやうとする徴候が微見えて來たやうである。これは時代趨向の然らしむる所であると共に本道が現代社會に向つて何等か重要な意義を有つてゐる證據だと思ふ。

古來斯道に關する書にして世に刊行流布せられしもの決して尠くはないのであるが現今版が絶えてをるので尤も最近出來たやうだが大方の研究資料に乏しきを憾むに堪えないのである。

本書は敢てそれらの期待に應ずるためではないが單に本道形成の一端を窺ふ便にもと先徳の遺書口訣に基いてその概畧を講説したので要は初學入門の行者等に資せんとするにあるのである。

本道が正しく時代相應の法門たることは著者自身早稻田の學窓に在る時分から窃に抱懷してをつたのであるが其後菲才を顧みず同志者と共に本道顯揚の目的で修驗道宣揚會な

るものを起したのである。是れ本書編集の必要に迫られた第一の理由であるのである。

然し本書に載するところ元より斷片的のものであつて秩序立つたものではないが本道大體の概念を與へんとする主旨によるが故に大畧の講説記載に止めて置いたのである。

尙本書に記載した事柄に就ては中に詮議を要する點も少ないのであるがこゝでは専ら先徳の遺見を尊重してそれに随つてその儘にしてをいたのもある。

敢て大方の叱正を得ば幸甚とする所である。

大正七年三月上院

伽南の寓居にて

著 者 豊

興 識

修驗道は絶対法身法爾の道にして當相即道即事而眞の法門なり。かるがゆゑに宗派的偏見を超越し一切萬教を綜合融化して打つて一丸とせんことを理想とす。而して絕對の現實生活に立脚して實踐躬行するを以て本義とし而かも不二一如の眞理を觀照しては三大僧祇を一念の阿字に越えて現在現身に法如を證するを以て基本とす。

修驗道目次

一、 役行者傳記	一
二、 修驗血脈	一六
三、 修驗分派	一七
四、 修驗道	二一
五、 山 伏	二七
六、 先 達	三二
七、 優婆塞	三四
八、 修驗道の教祖と所依經乃至教化	三七
九、 入峰修行の準備及び順序	四二
十、 峰中十界修行	五〇
十一、 峰中床堅觀	五四
十二、 峰中關伽水	六三

十三、	峰中灌頂.....	六四
十四、	大探燈護摩.....	六九
十五、	不動明王.....	七六
十六、	金胎兩部.....	八三
十七、	三種即身.....	八五
十八、	即神即佛.....	八六
十九、	修驗の衣體道具.....	八八
	以上 目次終り.....	

附録第一

一、	本山修驗問答.....	一一一
二、	聖護院宮代々入峰行列順序.....	一一九
三、	聖護院宮代々入峰御道筋記.....	一二一
四、	神變大菩薩御影供和讃.....	一二二
五、	神變大菩薩行狀和讃.....	一二六

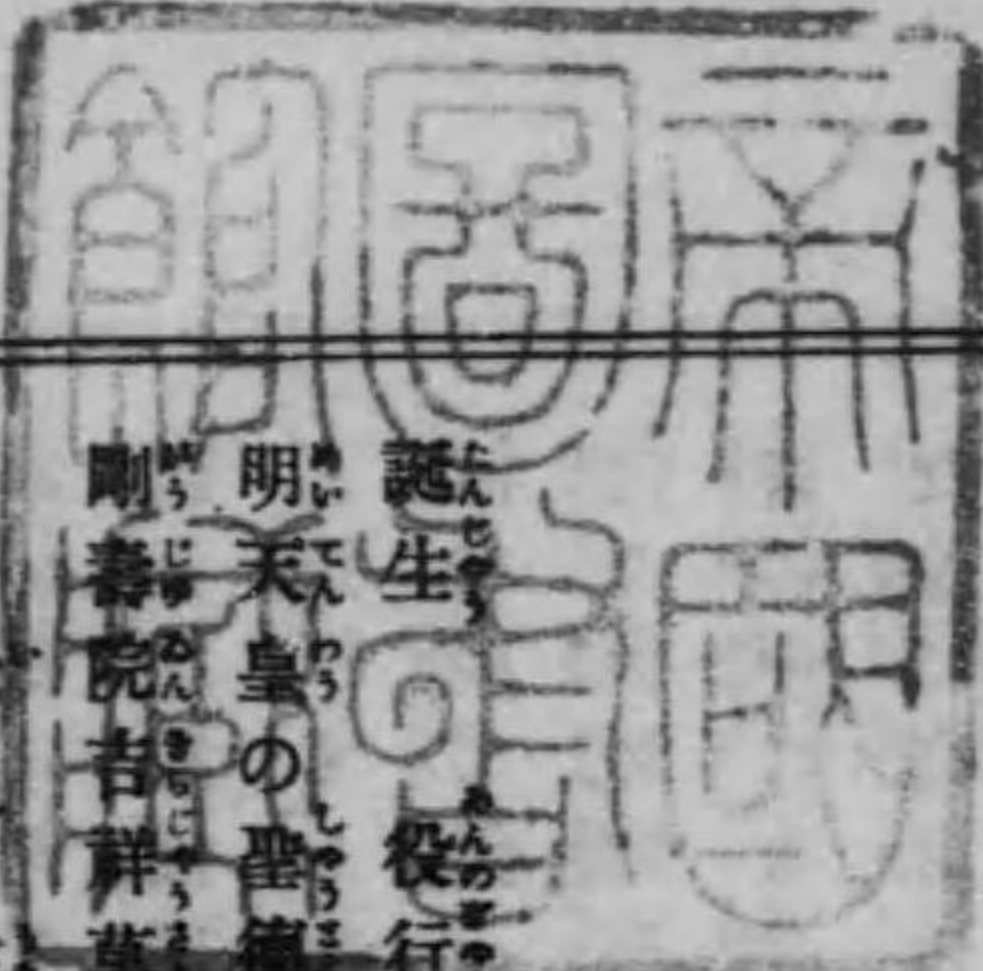
附録第二

一、	大峰密法大探燈護摩供作法.....	一四二
二、	大峰秘密底壇護摩法.....	一四七
三、	修驗理護摩私記.....	一五〇
四、	不動金縛秘密法.....	一五八
五、	金縛秘法.....	一六〇
六、	不動尊如影隨形密印.....	一六一
七、	金色不動明王所受兩個三身秘印.....	一六二
八、	五穀兩壇兩部之秘歌.....	一六三
	以上 附録終り	

修驗道

修驗道宣揚會長 三井 豊興 著

一、役行者傳記



役行者名は小角(又おつねと訓む)姓は役公(即ち高賀茂氏仁王三十五代舒
 明天皇の聖德六年正月朔日大和國葛木上郡茅原村今の葛上郡掖上村大字茅原金
 剛春院吉祥草寺即ち俗に中之坊と稱し又茅原寺といふは行者産室のありし所な
 りと云ふに生れたのである出生の年月日及び兩親に就ては種々異説があつて殊
 に父は如何なる人であるか史傳物などには無いとして多く傳へられて居らぬ然
 し私記に據ると父は高賀茂間賀介磨母は渡都岐比賣又の名白専女としてある御
 利生圖會に母に就て精進深齋して比丘尼の如き行をなしければ是を惡み世の中
 の拗強者なりと謗る者も多かりき頃は人皇三十五代舒明天皇癸己三月のことに

てありしが帝御遊獵の時茅原郷に行幸あり郷人は皆出で、拜みけり其後のこと
 なりしが彼の女常に變りし體に見へける故兩親は易からぬことに思ひて尋ね奉
 るに女答へけるは或夜の夢に一つの獨股杵天降り口中に入ると見て覺めたり怪
 しき夢なりと驚ろきけれども他言も何とせんかたなく云々と説いてあるし又或
 本には小角父なし母は加茂明神の末葉なり窮めて悪女なるが故に三十歳に至る
 迄夫なし或夜夢らく牛角を呑むと而して孕むことあり故にその名を小角と號す
 と掲げてある斯く母の生涯にも異説があつて判然として居ない而かも行者の家
 柄に就て調べて見ると高賀茂氏と云ふのは大物主神の神裔大田田禰子命の後で
 代々大和國葛城の地に住んで可なり廣い領地を有つて居つた豪族である元享釋
 書の中にも高賀茂氏山川數百里とあり又古今著聞集の中に當麻寺のことを誌し
 た條に高麗の慧觀僧正が導師となつて供養式を行つた時に役行者が金峰山から
 法會場に來て私領の山林田畠數百町を供養のため施入せられたとあるのを以て
 鑑ると木葉衣の説の通り葛城郡は大低高賀茂氏の領地であつたことは事實のや
 うである又母の懐胎に就ては獨股を呑むと牛角を呑むとの二説がある勿論密説

であるが行者の眉間に小さい角があつたので小角と名付けたとあり行者が常に
 頭襟を被つてそれを隠したと云ふやうな説も傳へられて居るが後年修驗行者が
 不動明王の頂上蓮花を表示して頭襟を額に著けるやうになつた以所を考へて見
 ると面白い因縁があるやうに思はれる。
 秘記に行者懐胎出生の有様を述べて母氏夢らく天より金色の獨股降つて吾口に
 入る寤て後自ら身の重きを知るそれより以來遍身より光明を放ち異香内外に薫
 し自然にして人間の味を樂まず胎内に在る時母妨礙なし常に夢らく青衣の女來
 つて我をして大辨才天の畫像に異なることなからしむ既に誕生の夕に及んで五
 色の雲産室に覆ひ諸佛影向して出胎を守護し天衆來臨して魔障を降伏し玉ふと
 又傳記には色貌端正にして出生し王ふ時紅光室中に滿ちて紫氣天上に浮ぶ天女
 跪いて蓋を捧げ仙童侍衛して掌を合せ九龍水を吐き産湯となす又初生の語に曰
 く我本立誓願欲令一切衆如我等無異如我所願今者已満足化一切衆生皆令入佛道
 と唱ひ玉ふ云々と讃嘆してある。
 行者幼名は金杵丸次に役の小角と改め後又役の行者と稱せらる幼より才智勝れ

天性聰敏、一聞千悟三才にして文字を書き四五才にして佛乘に志し幼童の戯を外にして草や木の枝を集めて堂を立て砂や石を聚めて塔を組み泥土を以て佛像を作り禮拜供養せらるゝを以て無上の樂みとせられたのである。七才に及んで既に密乗を感悟せられそれから毎日不動慈救呪を十萬遍宛誦するのを日課とせらるゝやうになつた。而かも儒佛の二典は勿論天文地理の深理をも究められ又藤原鎌足公から神道を傳へ受け後に熊野證誠殿を拜するに及び兩部習合の秘奧神佛一致の極理を悟られたのである。斯る次第であるから世俗と自然交を絶つは勿論専ら持念觀行の三昧にのみ没頭せられ深く釋尊の遺風を慕はれて入峰修行を發願せられたのである。入峰修行の發端は十六歳の時葛城金剛山入を始めとし十七歳の時笑面山に入り十九歳の時紀伊の熊野から大峰へ駈け入り大誓願を發し大峰小笹山上に於て一百日の苦行を滿たせられそれより吉野へ駈け出でられたのである。次に二十歳の時吉野から大峰へ駈け入り七十五日の修行を終られて熊野へ駈け出でられたのである。後年前者を以て順峰の權輿とし後者を以て逆峰修行の始めとする。

葛城入山 斯く行者は研鑽觀行に餘念なかつたが三十二歳の時斷然家を棄て、葛城山に入り藤葛を衣とし木實を食ひ常に不動明王及び孔雀明王の神呪を誦し爾後三十餘霜の間巖窟に住し或は秘術を盡して海上を涉り或は五色の雲に乗つて至る所の靈山を徧歴修行せられ鎮護國家萬民豐樂を祈られたのである。實に行者は日本に於ける山岳修行の先驅者であり諸山開闢の先鞭であるのである。金峯山藏王權現並に十五童子出現 行者が吉野山奥山上の巖窟に座して此の山の鎮護靈神となるべき瑞相を顯はさんと一千日籠居して祈念を凝らされた時に初めに彌勒菩薩が現はれたが柔和慈悲の姿では叶はぬと云つて追ひ歸された次に千手觀音が現はれたが此山守護相叶はぬと云つて亦追ひ歸された次に現はれたのは釋迦如來であつたが此の像でも惡業深重の衆生を救ふことは出来ぬと云つて追ひ歸されて終つた最後に現はれたのが堅固不壞の金剛藏王であつたので善哉と云つて安置せられたそれと同時に十五童子も湧出したのでその内除魔童子(本地釋迦佛護世童子)本地獅子音佛(慈悲童子)本地靈自在佛(惡除童子)本地阿彌陀佛(香精童子)本地栴檀香佛(檢増童子)本地阿閼佛(劍光童子)本地帝相佛(虛空童子)本

地虚空住佛の八大童子を吹越多和水飲玉置深山禪師小笹笙岩屋等に安置し又羅網童子本地雲自在佛福集童子本地獅子相佛宿著童子本地度一切世間苦惱佛經童子本地須彌頂佛未出光童子本地東北佛常行童子本地常光佛修飯童子本地梵相佛の七大童子を釋迦留岳大福山紅宿一乘嶽般若嶽金剛山二上宕屋等に安置せられた。

行者傳記に據ると出現せる藏王の尊體を秘し天曆帝と役行者と御手づから二尊を作り添へて金峯に安置せられたとある三尊は三世了達の妙體隨緣真如不可得の義である即ち過去は釋迦現在は觀音未來は彌勒でこれが金剛藏王の尊體である又傳説に依ると金峯山の權現は句大兄廣國押武金日天皇即ち安閑天皇を祀つたものであると云ふことである尊像はその色青黒で三股の寶冠を頂き本地三身の表示三目を具足し三界の衆生を照すの意左手を劔印にして腰に安き地魔を降伏して國土を鎮護するの意右手を三股形にして打つ勢をなし天魔を摧伏して正法を守護するの意左足に盤石を踏み四海の重障を鎮め萬國を安寧ならしむる意右足に空中を踏む勢をなす暎宿作障を攘ひ邪鬼惡魔を降伏し福祐快樂を保たし

むるの意

參内祈禱 皇極天皇の元年七月客星月の中に入つて種々なる天變があつた時恰かも行者の威驗高德が天下に響いてをつたので自然天聽にも及んでをつたため至急參内して祈禱せよとの勅使を蒙つたので宮中に於て七日七夜の間祈禱を修し亂を轉じて一百日の早魃となしたので王位が恙なかつたと云ふことが古書に見えて居る。

荒神示現 葛城山の東北方の靈巖に於て紫雲聳え瑞光頻りに輝いたので行者がそれを御覽になると勇猛の一神が示現して行者に向ひ我れは是れ靈亂荒神なり惡人を治罰し三寶を衛護す故に三寶荒神と稱す九萬八千夜又眷屬あり晝夜守護すとそこで行者は善哉と云つて之を鎮められた時は恰度仁王四十一代持統天皇元年である此の尊は本朝最初の示現神で本地は大日如來であつて尊名に多種ある三寶荒神と云ひ胞衣神產生神立増神三世荒神靈亂神飢渴神貪欲神那行都佐神障碍神竈神などと稱へられてをる内心慈悲にして外相暴惡常に佛法僧の三寶乃至身命財の三寶を守護する神であつて尊形は首に寶冠を戴き三面六臂を具足

し右の第一手には獨鈷第二手には智劍第三手には寶箭を持ち左の第一手には金鈴を提げ第二手には寶珠第三手には寶弓を持つてゐる。

當麻寺と孔雀明王 當麻寺は推古の朝聖德太子の御すゝめに依つて麻呂親王が建立せられ御願寺に准ひられたのであるが建立後六十一年を経て親王の夢想によつて伽藍の地を改めて役行者練行の地に移されたのである。天武天皇の白鳳十四年に高麗國の惠觀僧正を導師として供養せられた時に行者が金峰山から法會場に來て私領の山林田畠數百町を施入せられたとある。本尊佛たる丈六の彌勒佛の御身の中には金銅一握手半の孔雀明王の尊像一體をこめられてあると傳へられてある。此の孔雀明王の尊像には面白い縁起がある。或時行者が大峰三重の瀧上にて九尺五寸の骸骨に出會した。その骸骨は左の手に鈴を持ち右の手に獨鈷を握り仰ぎ伏してをる行者がそれを捕いやうとする。金剛の如くで動くところの沙汰ではない。そこで行者が早速不動尊に祈るとこれは汝が第三生の骨である。此の山を修行したのはもう七生である。若しも取りたいと思はゞ孔雀明王の法を行へとおさとしがあつたので彼の秘法を修すると易々と動かすことが出來たので

鈴を取つて大峰三重の瀧に納め獨股を取つて孔雀明王の尊像を鑄て當麻寺に納められたもの則ちそれである。

箕面山瀧入 葛城修行中不動明王の靈夢によつて攝津箕面山に到り寶劍を振つて瀧口に入り七寶所成の宮殿に至り門を叩き役優婆塞此砌に來れりと宜ふや窟内から德善大王此所に座すと應ふを聞いたので宮殿に入つてあたりを御覽になると中央に金剛寶座あつて龍樹菩薩が座して大法輪を轉じ外院には光明雲臺あつて天人聖衆が微妙の樂を奏でてゐる辨才天女と宇賀神將が左右に侍衛し十五童子八萬大士が前後に圍繞してゐる。則ちこれが龍樹の淨刹である。此の莊嚴なる秘密道場に於て直接入峰灌頂の秘法を御受けなされたのである。

鬼神濟度 行者は祕祈密咒に仍つて幾多の惡人を濟度したがその内でも赤眼黃口外五鬼を濟度して惡心を翻さしめて善心を生せしめ終に師事せしめたと云ふ。赤眼黃口の二鬼は後に前鬼後鬼と改名して行者から授けられた見我身者發菩提心云々の四句の偈を常に唱へて人間になつたと傳へられてをる。

久米岩橋と行者配流 葛城山から金峰山の間は非常な峻岨で行路艱難であつ

たから行者は山神を集め岩橋を架けて便利を計るべく命じた、そこで晝夜兼行巖石を運んで經營に努めたが仲々成就しない行者は怒つて速に架橋する様嚴命した時に諸神達が異口同音に言ふには葛城山の主神たる一言主神が姿醜くきを耻じて晝は出て來ぬために仕事は抄取らぬと答へたので行者は更に一言主を召したたが肯かなかつたから行者は印文を以て一言主を面縛して深谷に押し込めて終つた一言主は憤り宮人に夢託して行者は國家を窺ふ反逆人であると讒した文武帝は大に驚かれ行者を召さうとしたが虚空に飛行して捕へ難いので止むなくその母を取り押へ都に連れて行つたので行者も悲しみの情に堪へず囚となられた斯くて行者は大島に流されたのであるが途中不可思議の事のみあつて警護の役人を驚ろかしたのであつた然しこれにも異説があつて續日本記に依ると從五位下韓國連廣足行者を師とす後其能を害して讒するに妖惑を以てす故に遠所に配せらるゝとあり木葉衣などにも歴史を詮索して行者を讒したのは廣足であると断じてゐる此の説が正しいやうである。

富士山修行 伊豆大島に配流中三個年の間晝は禁を守つて籠居したが夜にな

ると富士山に飛行して修行を済し黎明には島に歸つて居るのが常であつた又或時海中に五雲立ち登るを見て飛行して江の島に行つて見ると辨財天女が出現して居るのに會つた今の江の島辨財天女である其外大島配流中伊豆あたりは勿論の事武州あたりへかけて山岳修行をされたと云ふ傳説は隨所にある。

行者赦免 行者配流後人民牛馬數多惱み患ひ霜雪時ならぬに降り五穀實らず様々な不思議が多かつたので天皇は憂慮せられて居つたが或時一寸まどろませられると御夢に紫宸殿の庭前と覺しき所に髪を結つた一人の童子忽然と現はれ「我は北斗星なり此頃人民多く惱むこと役行者罪なくして配流せらるゝなり和光同塵は結縁の初め佛神異名同體なりとの聲の中から光を放ち遙か天上に上り去つたと御覽じて間もなく目覺められた早速天の御告げなりと大島へ赦免の勅使を立てられたが行者は既に神通力に因つて此事を知り瞬くの間に都に上られ勅使がまだ僅か行つたか行かないかと思ふうちに途中でビツタリ勅使に會つたと云ふのは不思議である。これから日本國中意に任せて修行あるべきやう改めて勅許があつた。

愛宕大権現 文武帝の大寶年中行者は雲遍上人と共に愛宕山に登らうとして清瀧まで行くと瀧の上に雲が起つて俄に大雷雨となり進むことが出来ぬので二人力を合せて秘呪密言を以て祈禱すると忽ち一天晴れ渡り地蔵龍樹富樓邦毘沙門愛染の五尊體が現はれ光明を放つたがそこに天地に瀾り蟠つて居る様な大杉樹があつてその杉の上に天竺の大夫日良唐土の大夫善界日本の太郎房が各々その眷屬を將えて現はれたその圍りには頭は神で面は鬼毛が生ひて角のある九億四萬餘の天狗が雲霞の如く集つてゐる二人に告げて云ふには我等前二千年靈山會上佛の附屬を受けて大魔王となり此山を領し群生を利益すと言ひ訖つて消えて終つた因つて二人はその杉樹を祀つて清瀧四所明神となし瀧の上に千手大士を安置し又五岳を置いてその地を鎮めたと云ふ朝日峯大寶峯高雄山瀧上山賀魔藏山これである行者は此の事を上奏したので朝廷に於て神廟を朝日峯に立てた雲遍改名して泰澄と云ふ開山第一世である愛宕護大権現と稱するものこれである。

行者飛行 葛城入峯以後行者は種々神變不思議を現し海となく山となく雲に

乗つて飛行し神通自在或は宮廷に參内して國家安穩の祈禱を修して奇特を露はし上下百官の貴敬を受け或は鬼神の邪見を度して成道せしめ後年佐夜中山の賊徒を秘縛して轉心せしめて弟子とせられた等敬嘆の外ない又行者の開いた梵刹にも金剛山轉輪寺大黒寺龍安寺吉祥院等あるかくて仁王四十二代文武天皇の大寶元年辛丑六月七日五色の雲に乗じ母を一鉢に乗せて唐に飛行して入定を示されたのである時に年七十一歳であつたけれども果して事實上入唐したかどうかと云ふ事は明かではない唐に於て道昭法師が法華經を講じた時に聽聞中の群虎の中に役行者が居たと云ふことは古書にもあるが大に判断に苦しむ所である正説として傳へらるゝ所によると攝津の箕面山に於て入定せられたと云ふことである。

秘記に行者を讃へて月氏國に出でゝは迦葉尊者と號し如來の心印を禀け震且に至つては香積仙人と名けて生滅不二の秘術を顯はし吾朝に來つては役優婆塞と稱して十界一如の密行を示す誠に知りぬ三國一體の聖者隨機應現の行者なり權化の所行凡慮測り難し靈異の趣誠にそれ由あるものか然れば則ち高山の峯に攀

じては上求菩提の智徳を表はし幽谷の深きに下ては下化衆生の悲想を示す静々たる朝には身を定水に洗して諸漏已に盡し臍々たる暮には心を秘道に運んで生死長へに断つ凡そ其効験を尋ぬるに五色の雲に乗つて大空に遊歩し空鉢を聚洛に飛して以て諸佛の供養に備ふ悪鬼多く跡を顯はし法を聴き業輪脱息すしかのみならず雨水裳を濡さずして上求の徳天に顯はし足に蠢類を踏ますして下化の益地に示す此の如きの勝業稱計すべからず云々と又傳記には寔に行者の法儀は形を俗に穢し法を眞に現はし凡身即佛の道理を覺り邪正一如の觀解に入つて自ら十界依正の修行を勤む毎年大峯葛城に入る事悉多太子の入山に準へ初客は四行を勤め十界修行を盡く満足し轉凡入聖の勤をなし既に峯を駈け出るは我佛出山の相是なり凡と云つて捨つへからず聖と云つて取るへからず凡聖一致尙車輪の如し一輪欠くる時は衆を度することかなはず此の觀念明かなれば手を擧げ足を動かす皆これ密印風聲水音皆是れ眞言山河大地皆是れ法身萬木苔石皆是れ本尊云々と

論號宣下
行者入滅後暫らく入峯の跡絶えたが眞言宗に聖寶天台宗に良瑜が

出て中興してから日本全國に廣まり如何なる鄙びたる村里に行つても山伏行者の存在しない所はない程隆盛になつた而かも一般社會に對し敬神崇佛の觀念を鼓吹するに預つて力あつた効績は没することが出來ぬ殊に徳川時代に最も隆盛を極め大峯修行を経たものは法印御免とあつて法印號を唱ひ恰かも出家を僧侶と稱する如く法印と云ふ稱號は山伏行者に對する代名詞の如くなつて終つたかく修驗山伏行者の勢力が絶大となるに連れ終に役行者の効績も朝廷の認むる所となり寛政十一年行者一千百年忌に當り光格天皇から神變大菩薩と諡せられたのである。

勅諭

勅優婆塞役公小角海嶽抖擻之功古今辛苦行前超古人後絕來者若夫妙法明教之施四海也非以神足僂脚之通五方乎以是千年之久馨香愈遠衆生之渴仰凡夫益盛天女靈夢碧空神藏吉加瑞爰應因示特寵以贈徽號宜稱神變大菩薩

寛政十一年正月二十五日

二、修驗血脉

本山修驗密法相傳血脉

大日如來（金剛薩埵）法喜菩薩（龍樹菩薩）役行者（義學）義玄（義真）壽元（芳元）助音（黑珍）日代（日圓）長圓（圓珍）大僧正（智證大師）聖實（理源大師）增命大僧正（淨藏）勢祐律師（智靜）大僧正（靜圓）權僧正（靜覺法師）增譽大僧正（行尊）大僧正（覺宗）大僧正（覺讚）大僧正（實慶）大僧正（覺實）僧正（覺仁）法親王（靜仁）法親王（長嚴）大僧正（定豪）法印（良尊）大僧正（道慶）僧正（行昭）大僧正（道瑜）大僧正（覺助）法親王（仁惠）法親王（道昭）大僧正（良慶）大僧正（良瑜）大僧正（靜尊）法親王（聖助）法親王（覺增）法親王（道意）大僧正（滿意）大僧正（道興）大僧正（道應）法親王（道增）大僧正（道澄）法印（興意）法親王（道晃）法親王（道寬）法親王（靜惠）法親王（覺譽）法親王（道祐）法親王（道尊）法親王（行惠）法親王（道承）法親王（忠譽）法親王（盈仁）法親王（榮仁）法親王（雄仁）法親王（信仁）法親王

當山修驗傳燈血脉

役小角

大日如來（金剛薩埵）龍猛菩薩（聖實尊師）觀賢僧正（貞崇）僧正（淳祐）僧正（元果）僧都（助賢）法

師（藏冥法師）元助法師

仁海僧正（成尊）僧都（義範）僧都（勝覺）僧正（定海）僧正（元海）僧都（實運）僧都（勝賢）僧正（成賢）僧正（憲深）僧正

三、修驗分派

役行者入定後所謂入峯修行なるものは一部行者の末徒に依つて傳へられつゝあつたのみで未だ宗教界の勢力を成すに至らず従つて社會の耳目を曳くに足らなかつたが聖實良瑜が出てから行者の法儀は愈々開闢せられ修驗山伏道となつて傳教弘法以前の密教を發達せしむるやうになつた斯くて時勢の推移と共に天台眞言は勿論神道儒道道教等と結びつき種々なる流派に分れ鎌倉時代から室町時代にかけて日本全國にあまねき渡るやうになつた同時に諸國の高山靈嶽を中心としてそれぞれ各地方に於て各々一派を形造り出羽羽黒山相模大山上野日光山信濃戸隠山加賀白山伯耆大山伊豫三島豊前産山等各々大峯修行の風習に擬へその法儀を移して近在の山伏行者を歸屬統一して獨立の一派をなし大峯熊野の行

者と相對立して各々勢力を伸張し戦亂時代に入つてはその教義信仰が時代の風潮と調和したために朝廷幕府は勿論諸國武士の尊崇保護を受け宗教界の一大勢力をなしたのである。故に以後暫らく修驗山伏の勢力は政治的にも社會的にも伸張せられたのである。

然るに明治維新の大變革に依つて神佛混淆の廢止となるや修驗道もその厄に遇つて一時廢止されたのであつたが其後間もなく復興せられ天台宗寺門派と眞言宗醍醐派とに依つて傳へられることになつたが舊修驗山伏の大部分は四離滅裂になつて代々繼承した先達乃至年行事其他に至る迄の家柄のものも復飾して神官になるもの其他天台眞言日蓮等の各派に歸入するも多くさもなくば至々還俗して農になるもの等様々でさしも大勢力のあつたものが一朝にして見る影もない有様に變動して終つた。維新前まで最も勢力のあつたのは本山派で次いで當山派羽黒派彦山派等であつた。

本山派と云ふのは圓珍智證大師が熊野那智瀧に一千日籠居し大峯修行をされた後三井の長吏で聖護院元は常住院と號す元祖たる増譽大僧正が大師經歷の跡を

繼ぎ大峯修行をされたが殊に堀河院の寛治四年白河法皇熊野御幸の先達を勤められてから熊野三山を本山と稱しその末徒を本山衆と云つたのである。黒塚の語の詞に我が本山を立ち出でとあるところから本山と云ふ名稱が出たと木葉衣に考證してある所から考へて見ると本山とは熊野三山を指して云つたのが元で熊野行者に冠せられる名稱になつたものらしい。熊野權現は當時社會一般の信仰の中心となり朝廷幕府の尊信も深くあつた故に熊野山伏の勢力は遙かに他の山伏派を壓しその行者は全國に散在してをつたのであるがこれらの輩が行尊増譽の門下に統一せられて從屬したのであるが斯様な關係で聖護院に屬する山伏を本山衆と云ふやうになつたのである。本山派の勢力は諸國に及び三山檢校は永らく獨專の姿であつた。後年聖護院は門跡寺院となり代々法親王が住職せられて末徒を統御されたのである。聖護院今は天台宗寺門派園城寺別格大本山である。

當山とは大峯を指して云ふのである。菩提正當の山本有不改の當山の意で楚網經に當々に常に因あり故に當々の常住の法身ありと故に當山と名付くと或書に引用してある。當山派は眞言小野六流の祖たる聖寶理源大師が役行者の跡を慕ひ役

行者開創後百八十年宇多天皇の勅を奉じて修驗道を再興したのを始めとする三寶院は理源大師草創の醍醐寺門主の室で即ちこの三寶院に屬する山伏を當山派と云つたのである。當山派は室町時代に入りて大に勢力を得幕府より修驗山伏の管領に任せられるやうになつた。三寶院は眞言宗醍醐派大本山で門跡寺院である。彦山派と云ふのは役行者自ら開創し弟子の木蓮羅雲蓮王之を經營したとも云ひ又役行者五代の末徒壽元が聖武帝の天平六年豊前の彦山を開創して宣傳したとも傳へられてをる鎌倉時代には後伏見帝の皇子助有法親王を座主に迎ひ血統相續して入峯修行を専修し山内二千八百の僧坊を有し四方七里の地を領して勢權を極めたのである。

羽黒派と云ふのは役行者八代の末資黒珍が桓武天皇の延暦四年出羽國羽黒山を開創し三十六院三百坊を建立して弘傳したのだと傳へられる役行者こゝに參籠修行し行基及び空海も亦此の山を歴行したと云ふことである。鎌倉時代に至つては勢力益々増加し本山派と伯仲の間にあつた。月山湯殿山を興の行場とし之を併せて羽黒三所權現と云ひ陸奥出羽越後佐渡信濃を權現の敷地と稱し牛王卷敷を出して山の所用を賦課し山には長吏學頭院主先達等の職を置き所領の僧坊八千と稱せられ大峰熊野と相對して一大勢力を形成した。

四、修驗道

修驗道と云ひ山伏道と云ふ名義が出来たのは何時頃からであるか充分に明かではないが古記に依ると第二世義學(持統天皇の御代)が始めて頭襟と不動袈裟を用ゐたとあり第八世黒珍(桓武天皇の御代)に至つて修驗度位を定めたとあるし又古歌や國文史上に山伏に關する歌や實話が澤山散見してゐる所から見ても随分古くから用ゐられてゐることは解る。要するに斯様な名稱は役行者の傳へた法儀に對して自づと出来上つたものであると想はれる。

修と云ふ字は苦修練行の意味と云ふ字は驗徳の意味である。則ち修は修生始覺の修行驗は本有本覺の驗徳である。佛道に八萬四千の法門があるがそは要するに大日經の所謂實の如く自心を知るの唯心の一法に外ならぬ故に頓成菩提を求め不變不動の心地に達せんがために餐霞臥雲捨身の苦修を修めて實の如く自心を

知り即身即佛の實驗を示すと云ふ所から修驗と云ふ名稱が出て来たのである。又呪驗と云ふ字の呪を修に書き換へたのだと云ふ説もあるこれは毘那耶經に呪得驗とあり又靈異記にも呪得靈驗とあり三代寶祿にも呪驗とある所から木葉衣などにも又明治初年の御届書にも引釋して居るが元來役行者の法儀即ち修驗道なるものは持咒得驗の法門云ひ換へれば秘密陀羅尼を誦して一切衆生を利益する法門であるから咒驗と云ふ名稱はふさはしいものであつたに違ひない一體咒と云ふのは眞言陀羅尼のことで秘藏記に諸經の中に陀羅尼を説くこと或は陀羅尼或は明或は咒或は密語或は眞言なり是の如きの五つの儀如何陀羅尼とは佛光を放つて光の中にて説き玉ふ所なり是の故に陀羅尼と明と其義異らず咒とは佛法未だ漢地に來らざる前に世間に咒禁の法あり能く神驗を發して災患を除く今此の陀羅尼を持する人能く神通を發して災患を除く咒禁の法と相似す故に咒といふとあり、こゝでは邪咒咒禁の意味に用ゐてある心鑑鈔の中に秘密神咒を修することとは世界の祈禱なり譬へば螺贏の螟蛉を咒するが如く己れに隨て類を化すとあり又咒は陀羅尼なり華には總持と云ふ又之れを密說般若と謂ふ未だその義を

詳にせず斯れ之の人にして當に之れを知るべし然れども已むことを得ずして而かも強へて之を言はゞ一あり咒は鬼神王の名なり譬へば王令既に行はれて天下に普きが如く鬼神王の名を稱すれば其屬敢て害を加へず是れ世界を利するなり又軍中の密號の如し相應ふれば之に敵せず是れ人を利するなり又密獸遮惡なり他の惡を避けんと欲して他のために咒すれば己れ之を知ること無くして暗に其惡を止む之を調伏と謂ふ螺贏を咒するとは螺贏もと子なし桑虫を取つて敵て之を瘞して幽にして之を養ふ祝して曰く我に類せよと久しくして化して蜂と成ると云ふこゝろは咒を念すれば衆生も所願の如く非を改め惡を轉じて當に善を作すべし桑虫すら尙色相を變ず況や人として能く咒し克く念せば豈諸の煩惱を轉せずと云ふことなからんやと。

同鈔の初めに小角大悟智見を以て心性を山伏となし修行を以て修驗となすとある如く山伏道修行の方便が修驗である則ち修は眞如の理を修するを云ひ驗は實相の智を驗すを名けて修驗と云ふのである。

而して修驗道を修驗宗と云はずに道と云つたには深い譯がある秘訣集の中にも

「宗とは偏に一家一宗の我法を指すなり道とは諸宗融通の稱なり能通を義となして一宗一法を執せず顯密禪法の三宗に通ず然れば即ち宗は義狭く道は理寛し總して佛道と云ひ聖道と云ふが如しとあり便蒙にも宗は尊なり乗教を尊んで而して佛道に到る故に宗と號す道とは一實中道の眞理なり生死去來の二道を超へて中道法性の心城に上る故に名けて道となす」とある通り道とは一切萬法を包容して常住不變融通無礙なる宇宙の大眞理を云ふのである。

道と云ふ字は首の字に之繞を加へた字である首は始で生に意味が通ずるし之は死で終の意味を有つてゐる、これ即ち道の一字は生死始終の意味を合して出來たのであるから生死即ち一であつて生滅不二の意味になるから字そのものが本不生の眞理を顯はしてゐるのである生きては死し死しては生きて轉變極まりなき因果の大法則も要するに不二であつて道の一字に盡きてゐるのである即ち生きては死し死しては生きて幾萬劫となく因果によつて輪廻してゐるのだから窮極まで推しつめて考へるならば生もなく死もないのである唯生滅ありと思ふのは淺見であつて死は還元の外ならぬと見てよい。

唯無常變化の世間相を以て有爲轉變なりと見るのはこれ位置の轉換若くは形相の變化より來る差別に外ならぬ有が無となり無から有が生ずると云ふ事はあり得ないだから萬有の眞理は生滅あることなく増減あることなく本來本有常住であつて法爾として而かも眞である法爾無作と云ひ本有本覺と云ひ中道法性と云ふ皆この境地を云つたものである。

本有常住であるから過去現在未來の三世を絶したる絕對の現實に立脚した現實主義活動主義の人生觀を根本としてゐるのが吾修驗道の本義である當相即道即事而眞の意義はこゝにある宇宙論(世界觀上)としての即事而眞は小宇宙(人生觀上)としての人間にあてはめると當相即道となる故に吾が修驗道は方便を絶したる絕對の現實生活に人生の基礎を置かんとする所に宗教としても哲學としても特殊の立脚地があるのである古來俗人宗たる所以を赤裸々に發揮したのは自然の現象なのである。

峯中秘記に夫れ修驗とは自受法樂無相三密の内證十界不二三身即一の宗旨なり、然れば則ち彼の狀相を訪へば兩部本具の眞體此の勝利を尋ねれば即身頓悟の妙

理なり其體法界に通して色量を絶す其智虚空に満ちて邊際を亡す實にこれ佛祖不傳の眞理以心傳心の當頭にして識の識る所にあらず言の言ふ所に非ず強へて之を不思議と稱す己心法界にして有無を離れ凡聖一如にして迷悟を絶す若し盲人のために之を説かば具抹雪鶴を以て乳色を示すが如し衆盲各々に異計して終に乳色を知らず故に自宗の意は佛教を假らず文字を立てず唯心を以て心に傳ふ設ひ師説教文に因ると雖も而かも文句を以て道となさず須らく詮を忘れ意を得る即ちこれ心に傳ふるなり然りと雖も至道は無言にして言はざるなく般若は無智にして知らざるなし眞理を動せずして諸法を建立す諸法は則ち眞理なるが故に若し自心を見れば諸法他にあらず若し内庫を開けば衆象吾れにあり當に知るべし終日説いて終日説かず即ち破して即ち立し即ち立して即ち破す修驗一實の謂誠に以て爾るべし若し念を以て念となし生を以て生となすは常見の所談なり無念を以て無念となし無生を以て無生となすは斷見の所感なり念ふても無念生しても無生なるは第一義空なり空とは眞空にあらず妄想空なり妄想空なる時は諸法宛然なり諸法は阿字不生なるが故に一塵をも染ます一法をも執せず諸法は

六大四曼の體相なるが故に一塵をも捨てず一法をも動せず十界の依正迷悟の二法悉く阿字圓明の覺體にして善惡念慮の起不起を論せず本來寂照の具徳なり凡そ諸宗の門戸區々なりと雖も佛道初入の門は唯一心を靜むるに在り流轉生死は一念に迷ふて差別の妄業を生じ寂滅涅槃は萬縁を亡して以て平等の眞理に歸す眞理とは自性の本源なり若し教文を學んで本源を了らざれば修行に於て益なし譬へば貧にして他の寶を數へ盲めて燭を執るが如し所謂本源とは自性清淨の心なり自性清淨の心とは六大不生阿字なり六大不生阿字は本より起滅なし起滅は即ち是れ安心なり安心は龜毛兎角の如し安心本より不生なりと了して前後際斷の心地に安住するを大覺位と名づく此の如く行住坐臥一切作用の時切に忘了なり急急に眼をつけて之を觀よ忽然として心眼即開の大益を得ん是れ則ち頓悟不生の大事生死自在の法樂修驗の大意なりと

五、山伏

山伏又は山臥山武師とも書く山に臥伏して修行するから斯様な名稱が出て來た

とばかり思ふは浅見である。山は俗塵を絶した寂浄な場所であるから山林寂靜の地に入りて三昧に入ると云ふ様なことは經軌の中にも隨所に述べてあつて修行の道場としては實に適當してゐるし山と佛教とは深い因縁のあることは云ふまでもない。釋迦は山に據つて覺を開き役行者は山に因つて秘密道を獲た古來の先德一人として山によつて得道しないものはないと云つてもよい位である。廣い意味から云へば山は地即ち地球の全體を意味し深い意味に取ると泰然不動の眞體であつて眞如の象徴である。又深く突込んだ秘密道の境界から云へば自心の本源たる淨菩提心を意味するのである。寺院には必ず山號のある以所は斯様な次第で深い譯があるのである。修驗灌頂啓白の文に夫れ當峯とは金胎兩部の淨刹無作本有の曼荼羅なり森々たる嶺岳は金剛九界の圓壇鬱々たる巖洞は胎藏八葉の蓮臺山河草木は全く遮那の直體嶺嵐谷響は自ら法身說法なり三部の諸尊濟々として羅列し無數の聖衆奇々として安座す故に十有色聲見聞を顯はし法爾の境智有空に絶す既に知りぬ法爾自然の曼荼羅は三密瑜伽の靈峯なりとある。

山と云ふ字は豎三畫を横一畫で結んである字である。豎三畫は法身報身應身の三

身空假中の三諦を表し横の一畫は三身即一三諦一念の一念不生阿字即身を示す。則ち三身の區別も要するに一身に歸し三諦も唯一心に歸すると云ふ意味合である。又伏と云ふ字は人と云ふ字と犬と云ふ字から成つて居る。人を法性にとり犬を無明にとつて考へたならば二字合して一字を成すから無明と法性と不二一體である。と云ふことにならう。即ち覺者の目から観るならば無明と云ひ法性と云ふ清濁深淺の差こそあれ要するに同一心の發作に外ならぬ故に根本に突込んで云ふならば無明即ち法性法性即ち亦無明である。眞俗不二と言ひ凡聖一如と言ひ煩惱即ち菩提と言ふ皆この意味である。だから神に成らうと考へることもなければ佛にならうと願はずとも吾人人間は本來の天真佛なのであつて佛にならうなどと考へることそのことが既に土臺間違つてゐるのである。本來吾れ即ち佛である。要は唯覺悟の一事にあるのである。

秘記に三身三諦は本有無作の内證色心不二の三德なり法性は大海の如く働轉することなし無明は波浪の如く隨緣あり故に海水と波浪と不二不異なり故に無明即ち法性法性即ち無明と説き三身即ち一身一身即ち三身と説す是れ山伏の名義

なり宗義は則ち萬法を山伏の二字に攝し勝利は則ち十界を行者の一身に歸す行住座臥の舉動無作三身の妙用龜言輒語の作業法爾恒説の法樂なり三業天運に任せ四儀菩提に讓る然れば則ち成佛を求めずして成佛を呈し凡身を改めずして覺位を證す顯密二敬の大藏修驗一實の源底なりと又山伏便蒙の中にそれ山伏とは小角の大悟智見なるが故に行者と行者とのみ之を知る心を以て知るべからず唯これ盡すべからざるものなり先づ體相に就て三身を明さは一には法身形二には報身形三には應身形なり初めに法身形とは優婆塞形の山伏是なり鬚髮を剃らず俗形を易へずして直ちに自相の本分を示すこれを法身形と言ふなり次に報身形とは摘山伏これなり實修實證酬因果の智體なり故に胎藏の峯に入つては從因至果の義を顯はし金剛の嶺に入つては則ち從果向因の理を示すなりこれを報身形の山伏と號す次に應身形とは比丘形の山伏なりこれ剃髮染衣の相なり或時は慈悲柔和の相を顯はし或時は忿怒勇猛の形を現す善人に向つては勸善を説き惡人に對つては懲惡を説く是れ則ち斷惡修善の化用應類應同の功德なりと即ち修驗の體相に三通りあることが解らう。

次に伏と臥の使ひ別けに就て言ふと便蒙の中に臥伏の義を分別するに凡そ兩義あり一に曰く山臥とは山は母胎八分の肉團なり是れ則ち本有八葉なり臥は本有八葉の山に住して無相真如の位なり是を本覺の山臥と名付け本有の山臥と號す本覺は父母未生已前本分圓地の内證なり是の故に未修行のもの此の二字を用ゆるなり二に曰く山伏とは乃ちこれ出胎の後茲の始覺修顯の峯に入つて彼の本覺性得の内證を示す此の位を始覺の山伏と稱す日藏上人の曰く既に法性真如の寶山に入つて無明煩惱の怨敵を降伏す故に山伏と名付く是を修生の山伏と言ひ外用の山伏と稱す既に無明を斷じ佛果を證す故に下化衆生の願に趣く位なり古記に曰く役君久しく山中に住し山に仍つて佛の智見を悟る故に山伏行者と謂ひ真俗不二の觀照を以て落髮を用ゐる故に優婆塞行者と謂ふ又佛頂大峯行者と言ふ皆至極の理なりと説いてある即ち山伏の方は入峯修行を満たした驗者に對して用の山臥の方は本覺無作の内證から敢て權門有相の方便修を超越した見地に立脚してゐるのだから天真佛たる未修行の者に對して用ゐるのである又山武師と言ふのは修驗行者が武術をも兼ねて修行したからさう呼びなされたま

でのことで深い意味はないが修驗行者は武士の片割れみたやうなもので武士的
 氣品は漲つて居たし實の武士や落武者で山伏行者となつたものも少くはなかつ
 たそれに修驗者と言へば二本差しで威張りこんで居たもので殊に徳川時代には
 大先達材になればすさまじい勢であつたと言ふことで十萬石二十萬石の格式の
 あつたものが澤山あつたのである。
 抑も修驗行者の全相は不動明王の尊容を象り自心不動三昧に安住するのだから
 明王と劍とは離るべからざる關係を有つてゐる如く驗者も亦惡魔降伏のために
 は劍を必要としたのである劍は驗と音相通じるし劍は大空三昧の智劍即ち般若
 の智慧の象徴であるから劍は驗者にとつては欠くべからざる密具であつたので
 ある心鑑鈔に修驗智慧を修行せんと欲せば惡魔降伏せよ能く惡魔降伏せよ利劍
 世界にあつて賊徒を殺す而して後魔軍の城を破つて獨り心王識の都に安座すと
 以て知るべきである。

六、先達

先達と言ふと近來は案内者位に思ひなされて御嶽山や成田山などの所謂講社長
 に冠せられる代名詞の如き感があるし行者と云ふ名稱も何となく品位が無さそ
 うにきり響かないやうになつて終つた然しそんな淺い意味からつけられたもの
 ではない先は規である達は通達の意味である即ち先達とは大乘の菩薩を云ふの
 であつて衆生を教導する導師の意味で阿闍梨の位を指すのである心鑑鈔に一の
 大先達あり一切に通達して諸人を導くこと自由自在なり大先達に達はすんば何
 すれぞ無明の衆生は自心を明すことを得んや是れ此の大先達と云ふは能く三世
 の因果を明了して諸人に先達すること自在なり大乘の般若を以てするが故なり
 菩薩は六度の船を以て此岸の衆生を救つて涅槃の彼岸に到らしむ大なる哉大先
 達の功德や本有の正道を具足す世間迷妄の衆生常を亂し理に逆らひ十惡五逆諸
 の罪業を致すものあれば悲んで之を救ふ云々と荷くも先達を以て自任する者大
 に心得ねばならんであらう。
 修驗の修法の中に五人の先達と云ふのがある東方は因の方木を司る故に宋先達
 と云ひ阿闍如來の位西方は果の方金を司る故に宿先達と云ひ阿彌陀如來の位南

方は火を司る故に柴燈先達と云ひ滅罪の方で寶生如來の位北方は水を司る故に
 關伽先達と云ひ生善の方で釋迦如來の位中央は四方を兼ね法然寂土を司る故に
 峯先達と云ひ五方五徳五智五如來の惣體なるが故に大日如來の位である、これに
 よつて先達の如何なるものかを知ることが出來やう。
 次に行者と云ふのは修行者の略で釋氏要覽に修行人を呼んで行者となす行は是
 れ所修二種行なり者は即ち五蘊の假なる者これよく修行する人なりと解釋して
 ある。

七、優婆塞

修驗行者を又優婆塞行者とも云ふが優婆塞とは梵語であつて譯して善宿男又は
 近事男と云ふ破戒を離れて宿し諸佛法に親近し承事するの意である敢て出家沙
 門の姿を用ゐず俗服俗形で剃髪せず又敢て寺院に居住することを要せずして天
 地自心を道場となし所謂形は俗に隠して法は眞に現じ凡聖一如眞俗不二の觀解
 に入つて佛道を修行するものを云ふのである是れ大日經の所謂在家の菩薩であ

る、同經第五卷に彼の在家の菩薩は五戒の句を受持す勢位自在にして種々の方便
 道を以て時方に隨順し自在に攝受して一切智を求む所謂方便を具足し舞伎天祠
 主等の種々の藝所を示現し彼々の方便に隨ひ四攝の法を以て衆生を攝取して皆
 阿耨多羅三藐三菩提を志求せしむ云々とある覺者の目から觀るならば如來妙嚴
 の眞相なるものは法爾として人造の増減を離れ赤裸々なる自然そのまゝの眞相
 に外ならぬ所謂俗形なるもの直ちに以て如來の眞相に外ならぬ又所謂出家に三
 通りある親を辭し世俗の家を出づ一つ道を悟り五蘊の家を出づ二つ果を證して
 三界の家を出づ三つである即ち修驗優婆塞は形の上の出家即ち身の出家を説か
 ず斯様な方便道を超越して肉食妻帯人生の自然に應じ社會生活上の俗業は従ひ
 専ら心の出家を主として佛道を修めるのである此の點が現代宗教界に向つて新
 意義を提供してゐると同時に一大權威を示してゐる譯なのである親鸞上人の開
 いた眞宗を以て俗人宗となし先見の明ありとして賞めたゝへる人はそれ以前の
 古より斯様な有り難き教のあつたことを知らぬ輩に外ならぬ而かも史上に溯つ
 て考へて見るならば大乘佛教の骨髓を以て所謂優婆塞宗にあることは既に早く

聖徳太子に依つて顯揚されてゐるのであつて修驗道の裏には聖徳太子の隠れてゐることを知らねばならぬ即ち修驗優婆塞は實に法身大日の位であるのである此の一面から云つても修驗道は現代に向つて一大權威を有つてゐるのである刺へ一切の宗教を打つて一丸とせんとする所に修驗道本來の趣意が成り立つてゐるが故に現代の宗教界に向つては最も意義ある問題を提げてゐるのである形の上の出家を問はぬ修驗道はワザと毛髮髻鬚を蓄ひて法身大日教たる所謂俗人宗たる以所を顯揚してゐるのである

有髮剃髮に就ては木葉衣に次の如く論じてゐる釋氏の剃除鬚髮は元よりその定式なり然るに山伏の意は偏に名利に拘はることを必とせず眞實修行は外相に碍る所にあらずと知るが故に或は有髮或は剃髮並にその意に任すと見えたり然れども醍醐門流にては尊師(理源大師)の御形像を以て規模とするが故に専ら沙門の形像に眠し入峯精進の間を除く外は常に剃髮するを以て如法とす本山家に於ては役君の御形像に隨ひ有髮を貴まると雖も猶代々の御門主御平常には剃髮にておはしますが故にそれに倣ひ奉るも多かりと見ゆ而かも實には道の在る所は鬚

髮の有無に據ることに非ざれば時宜に隨ひて如何にも如法ならんこそあらまほしかるべけれ但し此の如く言ふ所は姑らく外相に就て沙汰する所なり抑も實には密修の人は必ず有髮を以て最とすべきことはその文秘軌に見えたりと云つて蘇悉地經から引證してをる即ち頂髮を結べとか自ら結髮せよとか云ふことが同經上卷持眞言法品第六や其他にも見えてをる就て見よ

八、修驗道の教祖と所依經乃至教化

修驗道は本來法身法爾の説法に據るが故に教義上の内容に立脚して云へば嚴密なる意味に於て立教開宗の祖師なるものは無いと云つてよいと同時に各宗派の如く組織立てられたる教理や一範圍内に統一されたる教相なるものもないと云つてよいのである隨つて所依の經典として一定されたものもないのである否修驗道本來の成立から云つて有り得ないのである役行者を以て修驗の高祖と仰ぐ以所のもの是在家俗形の優婆塞として難行苦修の實踐修行者たり將た又毘盧覺皇の權化たる不動明王の分身として靈威開導の類まれなる本師たるその偉大崇

高なる行狀を渴仰しその法儀を尊仰傳承するに至つたに過ぎないのである。云ふまでもなく修驗道の法儀は密教を内容としてをるのであつて現在現身に法身法爾の曼荼羅を觀じ自身即佛の靈驗を修得するにあるが故に信仰の對照は大日法身佛であるが元より法身無量の法門であるから唯行者の意樂又はその機根に依つて萬種の諸尊を勸請し自らその本尊の眞體を顯現するを得るのである。だが然し當道に於ては専ら化他衆生を必要とする故に大日尊の化身たる不動明王を以て通途の本尊と定めるのである。

而して亦修驗の法門そのものが斯様に包容的である故にその所依經も亦取り立て、一局部に局限されては居らぬのである。廣漠たる宇宙の大自然を道場とし過去より未來に渡る永久的なる人生生活のすべてを眼目として居るが故に一切の經論一として修驗の所依經にあらざるなく一切の宗教一切の學問一切の事象皆修驗道の藥籠中のものに外ならぬのである。

斯く云はば甚だ散漫朦朧たる誹を免れぬであらうが實はそこに修驗道としての特殊なる立場があるのである。然し乍ら斯くの如きは一個人としての行者自身の

智徳の及ばざる所であるが故に常途の正所依として第一に法華經大般若經その内でも普門品理趣分心經を始め大日經金剛頂經蘇悉地經梵網經金光明經仁王經不動經錫杖經阿彌陀經法華懺法等の經釋を專讀の要經とし其他あらゆる一切の經論學術即ち人生のすべてを傍依經とするのである。

秘決集に當道は本來無作本覺の體性六大法身の極說にして偏圖權實の說を混し大小機根の待對を絶す然れども強へて修驗の所依經如何と問はば諸佛已證の法曼荼羅即ち法爾常恒經これなりと答へん法爾常恒經とは風樹頭に吟じ波砂石を撃つ法界の音聲これなりと答へん十界衆生の龜言輕語皆悉く阿字恒說の妙經にして依正の二報鎮へに三密の自樂を説く故に舌根を動かさずして能く性相を談じ音聲を震はすして言語法界に通す六根の獲益全く是れ說法の見聞覺知即ち聽法なり如來未だ一法を説かざる所一切諸法不生の色心専ら是れ修驗一家の宗旨なるをや故に佛經を以て所依となさず却つて經のための所依となるなり諸宗皆佛經を以て所依となして佛知見に入る譬へば病人藥方を求むるが如し修驗佛知見を以て初門となして本不生際に歸す無病の者會つて藥方を念はざるが如し凡そ經は

佛語なり皆佛心より出づ、修驗行者の自性は兩部不二の佛心なり、佛心争でか經のため所依と成らざらんや、一切の經論は自心より生ず、若し自心を知つて一切の經論を持たば唯自心を守り、經教を尙ひず、明者は其義理を尙ふ、暗者は其文字を守る、影像假名を信じて豈自心の如來を賤しめんや、世人多くは此の理に迷ふ、故に經論を學ぶを以て覺者と謂へり、徒に券を諍ふて金を得ざるの人なり、經論は自心の券契を指すなり、何ぞ文字を以て砂金となすや、券契文字を知らずして唯金を得るの人は如かず、設ひ經論を知らずと雖も、心源を覺知するは有智の人なり、實相の中更に文字なし、若し實相の中世間に文字ありと謂はば、即ち是れ妄心妄見なり、譬へば翳眼の者空裏の華を見るが如し、若し實智の眼を發かすんば、智行共に魔業なり、教法の學者智慧を以て至極となす不知理に達せず、實智の如く自心は無始邊を罄し、我覺不生は本初際を窮む、徒らに文字の株を守り、遠く成佛を未來に期せんよりは、唯須らく自身是佛と覺り、現身に本有金剛法身を證得すべし、當時諸宗の法門を聞くに、纔かに愚夫の耳を肥して、聲字實相の根源に遠し、今時諸業を見るに、苟も稚童の眼を飜りて、即身是佛の法體に官るたり、然れば、則ち修驗の形儀は有相憑文の

教綱に繋かれずして、直ちに阿字吽字の心海に歸入す、誠には是れ無相三密の内證機法未分の正底なり、甚深々々として、更に教化の方面に於ては、自ら即身大覺位を證すると共に、大悲化他の心地に住し、諸惡莫作、諸善奉行の意に隨ひ、菩薩優婆塞戒を堅持し、國家鎮護萬民豐樂のために、三密加持の法味を施こし、煩惱の病に應じて、萬差の法樂を興へて、有情を利益し、現前に證得の妙果を得せしむるを以て、本旨とするのである、行者自らの功德力と如來の加持力と、乃至法界の力との三大力の加持によつて、よく息災にして、延命なることを得、惡事災難諸病悉除、惡敵退散、厄難消除、轉禍爲福、家業倍盛、子孫繁昌等あらゆる願望を成就満足せしむることが出来るのである、就中春秋兩峯は、勿論諸國諸山に於て、探燈大護摩を修し、天下泰平、寶祚延長、萬民豐樂を祈禱し、治國平天下の基本を維持し、佛法と王法と、恰かも車輪の如く一致するやう守護すべきを專要とするのである、扱て修驗道の現世に於ける悉地成就、即ち自身自佛は、或は稍もすると、未來の理想として、單に空理空談に陥るかの如く考へらるゝが事實さうではない、役行者の

例に見ても遠くは釋迦の例に見ても乃至幾多の高僧先徳の例に見ても彼の森嚴崇高なる神秘的感情を喚起せしむる深山幽谷に於ける苦修練行は自ら行者の心身を鍛錬徹底せしめ解脱證得せしむるに與つて力あるは云ふまでもない。鬱凄たる老樹の影白雲峯巒を包んで鬼氣森然寂靜の氣身邊を壓するたゞ中に輪圓具足の阿土上に於て巖窟の中金剛不壞の盤石に安座し法界を睨んで自身自佛の觀法を行じ護摩の火焰に對して入我々入の觀念を凝す時は嶺嵐谷響溪聲松籟自ら法身の說法となり念誦の聲振鈴の音は佛天感應の讚歌となり直ちに秘密莊嚴の三昧に入つて六根自ら淨化し自性心蓮を開敷して自ら法性大自然の神秘に融化し法身自證の悉地を開顯すること疑ひないのである。

九、入峰修行の準備及び順序

古來の定規として入峯修行をなすには二十一日五十日乃至一百日間精進水行等を行つて心身を清淨ならしめ法華經乃至心經を始め大日咒慈救咒等を專讀し毎日神變尊前に於て三時の勤行を怠らす入峯前七日各々先達の室に集まり人數席

次所役等を定め入峯の期日には各々所屬の先達の室に會して各自の所役に基き出達の勤行を修し席次に從つて列次を整ひて出發する宿所に到着するや小柴を立て、先づ結界して入宿の作法を行ひ次に初夜作法入宿灌頂あり新客等に對して先達から入峯修行の資格を授かり誓誠を受けるのである、これらは最も嚴肅に行はれたもので出達前大先達から次の様な下知書が廻附せられたに因つてもわかる。然しもうこれらは過去のことである。

一、方儀前々より普門寺同行年寄役申付け置き候處大切に相務め候段神妙の事に候愈々同行中混雜無之様致すべく下知する者也。

寶歷元年辛未極月

聖護院宮大先達

京 伊豫坊 花押

奥州信夫郡渡利村

八幡院

其外誓誠狀には喧嘩、口論、雜談、喫煙等細々と認められて道中の喧噪不規律を警戒

禁示されたのである。

次に入峯修行の順序次第等は、大凡次の如きものであつた。

一、三時動行(初夜、後夜、日中)の三時に法華經、心經、諸尊陀羅尼等を讀誦し、床堅、床精、床柴、灯行等の法式を行ふのである。床堅と云ふのは、固打木を戴いて、即身即佛、即ち吾れ即ち佛なりと云ふ觀念に入つて、忍辱の行を修するのであつて、腕比、固打木を肩の上頭の上等に加ひ、床堅、觀文を誦し、三麻耶形、尊形、觀をなして、蓮花、三昧經の八句、同向、頌即ち歸命、本覺、心法、身云々の所謂、本覺讚を稱へ、再び腕比等を頭上加ひて、自心諸佛の觀想を凝して、頂禮するのである。床精と云ふのは、初夜讀經中にのみ、行ふもので、行道持咒して、床上の手續、散杖等を精むる法儀である。床柴、灯と云ふのは、日中動行の作法で、動行中、護摩を修するを云ふのである。護摩、先達が、小木を削り、堅横に積み、腕比を投げて、至致を燃るのである。

二、關伽(これは新客即ち初入峯の行者の日々の修行で、毎日三荷の關伽水を汲んで先達に捧げるのである)。

三、小木(これも前同様、新客日々の修行で、床柴、灯に用ゆる、黑白の法儀たる、小木諸宿

の定柴、灯に用ゐる、雜小木等、毎日三荷を採り集めて、先達に捧げるのである)。

次に入峯中新客の修行すべき法儀は、次の如きものである。

一、懺悔(初夜の後密室に入り、先達に向つて三業罪障を懺悔告白する法式である)。

二、業秤(入宿灌頂に次いで峯中四度灌頂中の第二であつて、螺の緒を以て新客の兩手を縛し、懸秤の形をなす)。

三、水斷穀斷(水を斷ち穀を斷つのであつて、これ斷食、苦行である)。

四、正灌頂(前述の諸作法は、正灌頂に入るの準備修行であつて、穀斷の満日未刻行者自ら六大法身たる自身を阿闍梨となし、本有無相の三密を以て、六大自性の心壇に入り、自證灌頂するものであつて、先づ案内の螺によつて、新客等宿前に集まり、沐浴して壇場に入り、先達の前に自灌頂の法に位して、清淨乳木を、柴、灯に加へ、式を終れば、乳木を先達に捧ぐるのである。行者即ちこゝに於て、入峯修行の本懐を満し、自身即佛を自證する譯なのである)。

五、相撲(延年峯中修行成就満願を慶賀するために行ふ、歡喜の祭儀である)。

六、小篠の宿に於て、採燈護摩を修し、修行中に採取した乳木を焚き、五佛の三摩地に

住して念誦祈禱す。

其外入峯中隨時に毎日供養法舍利塔掃除番渡過の延年等を修し又觀法には鼻端
隨字觀五停心觀數息觀五輪觀無相三密觀六大理觀等種々ある。
七、出成作法入壇灌頂の行者に入峯印證を授け峯中灌頂血脈の印として碑傳即ち
卒都婆を立て次回入峯の先達に笈渡しの儀あり。
斯くて出峯の後法要を勤めて終るのである。

入峯印證狀

大峯山號

右當峰者胎金兩部之淨刹十界同居曼荼也突然今新客寶壽院融傳屬大先達大學院
峯雲之手而入峰修行從因至果初度形儀等既訖者自高祖役優婆塞以降所師資相承
峰中灌頂並秘契密言等今悉以令授許之寔惟依龍樹薩埵靈德酬役君行者誓約者也
仍入峰印證之旨如斯

年號八月何日

大先達大學院峰雲圓
新客寶壽院融傳

其外維新前まで聖護院から諸國末徒の修驗に下した免狀には種々ある。

法印御免之事被聞召訖不可有子細旨

儉校宮依御氣色三山奉行若王子御房所被仰出也仍執達如件

正徳二年七月二十四日

法橋美元 花押
法橋定應 花押
奥州信夫渡利 八幡院

院號御免之事被聞召訖不可有子細旨

檢校宮依御氣色三山奉行若王子御房所被仰出也仍執達如件

文化三年七月二十二日

法橋快榮 花押
法眼淳應 花押
奥州信夫郡渡利村 八幡院勝運

權大僧都御免之事被聞召訖不可有子細旨

檢校宮依御氣色三山奉行若王子御房被仰出也仍執達如件

天保十年七月二十日

法眼秀孝 花押

法橋秀賀 花押

奥州信夫郡渡利村

八幡院昌峰

金彌地結袈裟之事被免許之由依

聖護院宮御氣色執達如件

志摩守藤原重經 花押

法印 譽旬 花押

法印 源甫 花押

奥州信夫郡渡利村

八幡院

延享二年八月朔日

依本山年行事職奥州信夫郡從先規持來通可致領知者也仍執達如件
貞享三年八月二十四日

積善院前大僧正 御判
奥州信夫郡福島 良藏院

大峯入峯の時期は一概ではないが、入峯の制度が定まつて以來大凡毎年十二月晦日晦山伏と云つて入峯して峯中に越年し四月八日に冬籠を終つて出法する。これと同時に御戸開の入峯が始まるのである。四月八日から七月十四日までは夏中當行でこの間に藏王供養法華仁王講不斷法華讀誦等を修する例になつてをる。此の間五月九日に出峯するのを花供峯即ち春峯と云つて順峯修行を終り大般若轉讀をすまして度衆との間に驗競あり又峯中常住方と終夜延年を行ひ續いて大曼茶羅供懺法華問答講等を修した。次に五月下旬に入峯して六月六日に出峯するのを御影供峯と稱し順逆不二峯の修行で行者御影供を終り驗競延年等を行つて六月下旬に下山した。

次に逆峯即ち秋峯の修行は七月六日に始まり十八日夜の秘法を終つて十九日から出峯したのであるが此の秋峯は諸國の先達が度衆新客を率ひて入峯するため

に盛んなものであつて修驗道の種々なる形儀秘法等も修行されたので一般世俗も此の期に雲集して入峰したのである。(明治維新前までと現今とは法儀作法等に於ても多大の變化を來してをるのは勿論である)

十、峰中十界修行

修驗道は本來山岳を以て修行の道場とするのであつて特に役行者の開いた大和國の大峰と葛城の兩山を兩峰と唱ひ定められたる諸國の靈山を國峰と稱し登山修行するのを入峰修行と云ふのである。大峰と云ふ山號は元來大菩提峰の略で一乘菩提山とも云ひ法華經に深い因縁のある山である。峰と云ふことは金胎兩部の曼荼羅の意味で内證理觀上に於て峰と云ふのは自身本具の佛性心蓮を云ふのであつて理觀上の入峰修行とは内證三昧修行を云ふのである。或る本に何故に大峰と稱するや謂く五部の聖衆峰毎に肩を並へ三部の諸尊嶽毎に座を列ねて餘峰に冠たり故に名付くとあり又頌にも中天の靈鷲山日本國に飛來し衆生を度せんかため故に大菩提の峯と名付くとある如く山そのものが胎

金胎兩部曼荼羅の表示になつてゐるから入山して踏破跋涉修行することは入峯即ち入壇の意味であつて兩部の灌頂を受けることになるのである。此の修行に大凡三種ある。順峯逆峯順逆不二峯これである。順峯とは無明緣起の軌則で原因から結果に至る修行則ち十界の中地獄道から佛道に入る所の修行である。これは春の季節に修行するから春峯とも云ふ次に逆峯とは法性緣起の表示で結果から原因に向ふ修行即ち逆に佛道から地獄道に入つて因果の法則を逆に修行する修行である。これは秋の季節に修行するから秋峯とも云ふ以上の二つが春秋即ち二季の修行が金胎兩部の修行なのである。次に順逆不二峯と云ふのは因果不二の修行で無作の修行無言無行の修行なるものこれである。季節は夏であるから夏峯又は花峯とも云ふのである。金胎不二の修行これである。

本來大峯修行は修驗獨特の修行であるから逆峯修行を以て正軌とする何となれば修驗本來の修行は佛を求める修行ではなくて佛を證する修行であるから則ち欣求の修行でなくて自證の修行であるからである。從因向果の修行で教を聽く位ではなくて從果向因の逆修に仍て事實に示す位なのであるから修して顯はすと

云ふ所に他の宗派と異なる趣意があるのである。教を聴く位は既に飛び越して終つてそれを實現する又は實行すると云ふ所に驗者としての特種の權威があるのである。修驗行者が常に智劍の威力に因つて降伏を第一義とする所以はこゝにある。説教や演説の様な口先きのことを主とせずして實行的祈禱を主とする以所も亦こゝにある。教の道を通り越して事實の道に入つてゐるのである。こゝに於てか吾々と佛と歸一する故に吾れ行ふ所これ佛道である。唯現在行つて敢て語らず而かも未來を求めずして自づと果を得るこれ自然であらねばならぬ。斯様な境地に立つた時吾身一切の所作皆佛事であり眞實であらねばならぬ。神變大菩薩の言に「此の法は人法自爾當相即道を以て立義となし極大深秘を以て教とす。所謂人法自爾の立義とは世出世の眞實を犯さず俗形を改めず俗衣を易ひす是れその立義なり。所謂極大秘教とは一切如來圓證智境界なる故に演説教示を以て普生を利せず。唯行廻衆生に施すを以てすとある次に十界とは地獄餓鬼畜生修羅人天の六凡と聲聞縁覺菩薩佛陀の四聖で六凡の修行は事觀の上の修行四聖の修行は理觀の上の修行である。六凡修行とは地獄道(業) 餓鬼道(殺) 畜生道(水) 修羅道(相) 人道(憍)

天道(延年)であつて大悲心を起して他のために苦を代り受ける修行であつて隨機方便の行儀である。

四聖の修行とは聲縁善佛の四界修行であるが他宗で云ふ四聖と云ふのは四諦の聲教を聞いて因果の理法を覺ると聲聞と云ひ十二因縁を觀じて生死を覺るを縁覺と云ひ大悲心を發して六波羅密を修行するを菩薩と云ひ自覺覺他覺行圓滿を佛と云ふのであるが修驗道に於ては一念誦理の觀行であるから謂ふ所の四聖は趣を異にしてゐるのである。則ち苦諦即ち法身集諦即ち菩提滅諦即ち涅槃道諦即ち自性これを聲聞の修行となし煩惱即ち菩提業障即ち解脱苦道即ち安樂を縁覺の修行となし無相六度を以て菩薩の修行とするのである(これ三乗の修行)。

無相六度とは一切衆生の六大本具の自體を云ふのである。即ち地(壇度)水(戒度)火(忍度)風(進度)空(禪度)識(智度)の六大本具の徳を云ふのである。次に佛界とは因果を修して始めて佛道を成じ得た位に名付る名ではなくて我等の色心肉體と精神二元が本來胎金本有の曼荼羅であつて當體そのまゝ修行を待たず直ちに以て遮那覺皇たる所以の法爾自然そのまゝの當體に對して云ふのである。即ち本

有の佛體を指すのである。修驗即身即佛と云ふのがこゝである。色即ち法身心即ち報身不二即ち應身これ無作の三身と云ふのである。此の境地に入れば森羅萬像悉く六大法身の依正であるから何れも皆本有の如來である。此の觀念に入つた時無始以來の輪廻の業壽を除き法性常住の惠命を成就するのである。これ修驗行者自覺證知の法であつてこれ即ち理觀の修行の必要とする以所である。秘記に曰く「六道六凡は是れ懺悔滅罪の道場四聖は是れ妙理不思議の内證なり然りと雖も凡聖一如の故に六道の衆生各々本覺の妙理を備へ十界互具の故に四生の群類同じく毘盧の佛體を證す經に曰く一切衆生の色心實相は常に是れ毘盧遮那平等の智身なりと之を思ふへし誠には是れ入峯修行の肝底修驗極宗の直説なり即身成佛の要道豈之れに如かんや云々」と

十一、峰中床堅觀

床堅とは大日如來の三摩耶形であつて十界具足の平等五輪の形儀で床とは金胎兩部の曼荼羅凡聖同居の道場を云ひ堅とは法身堅固の五大自身即佛の形儀を云

ふのである。即ち床堅觀とは修驗道の宇宙觀世界觀若くは人生觀とも云ふべきものである。

大日法身の體性は地水火風空の五大元素その形を云ひば方圓三角半月圓形の五形その性分を云ふと堅濕煖動無礙の五徳その色を謂ふと黃白赤黒青の五色種子を説くと又の「素夜」の五字方角に配すと中央東南西北の五方時季に配すと土用春夏秋冬の五時五臟に配すと脾肝心肺腎五行に配すと土木火金水五常に配すと

信仁禮義智五根に配すと身眼舌鼻耳五輪に配すと腰頂面胸腹となる。修驗は床堅觀に於て我身即ち五大元素の積聚身に外ならぬことを觀念すると同時に五大の當體即ち真如に外ならぬ故に修驗五大觀五輪觀はやがて亦真如無相觀となるのである。

抑も真如とは文字通りの空々寂々の意味ではない。現象實有の客觀的一元論を離れて無相空寂であるが而かも自ら真如過恒沙の功德を具足して而かも能く萬像を現し寂然として而かも能く照明するのである。この照徳を如來の五智とし其寂徳をば五大と稱するのである。即ち真如の寂體に圓明無尋照了の徳あるを大圓鏡

智と云ひ湛然平等和合不二の徳あるを平等性智と云ひ觀照無得徧照法界の徳を妙觀察智と云ひ無碍自在なるを成所作智と云ひこれらの四智徳の不二一體なるを法界體性智と云ふのである而かもこれらの五智の徳は即ち地水火風空の五大の徳である故に五輪即ち五智輪である識大は即ち五智の徳である故に五大を離れて識大はなく識大を離れて又五大はないのである凡夫の五欲を徹底させて淨めた境地は如來の五智であつて五欲と云ひ五智と云ふ要するに同一物に外ならぬ修驗床堅觀は五輪觀即ち無相真如觀であつて即事而眞の意義はこゝにある此の觀解に徹したものの即ち佛である。

儀形堅床

空風火水土



一字所成塔婆

一印大日覺體

頂額心腹臍

五大所生觀



我覺本不生



出過語言道

諸過得解脫



遠離於因緣



知空等虛空



五方出生觀



五輪建立觀

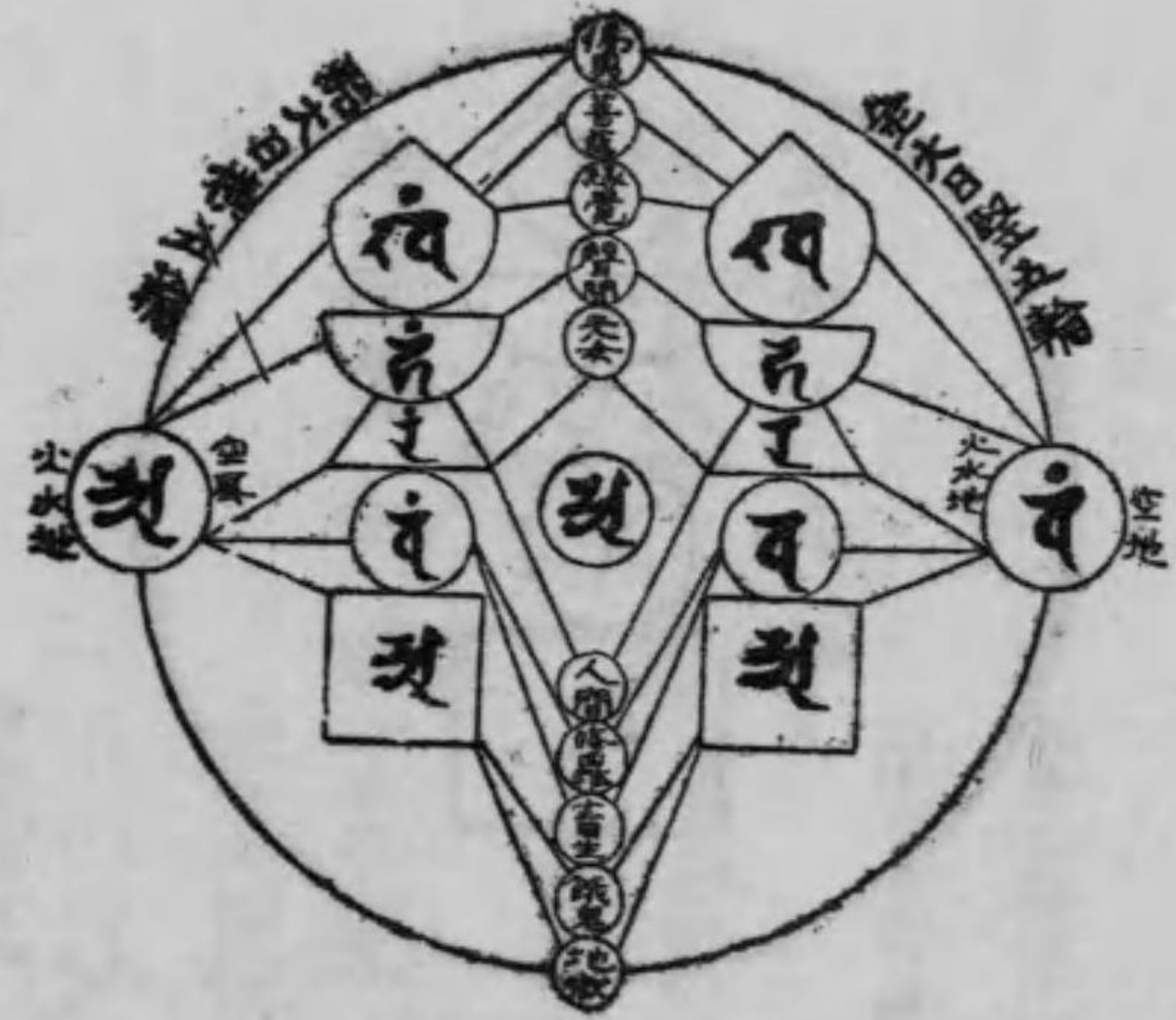


即身成佛觀



始覽本覽 二種成道

無相眞如極位



要するに此の五大なるものは情非情一切に遍満してゐる體性である故に修行を
 須のす觀念を凝さずして既に法然たる當體そのまゝが毘盧の全體である故に凡
 人も聖者も同一體で差別がない覺者不覺者の區別なく本來の佛であるのである
 即身即佛と云ふのはこゝを云ふのである、かるが故に五大の塔婆を以て大日如來
 の三摩耶形とするのである、大は五大日は識大如は不變來は隨緣の意味である横
 に十方に遍るを諸法の所依となし堅に三世に亘るを曼荼羅の能生となすのであ
 るから山河大地草木皆悉く五輪塔婆に外ならぬ、この觀念に徹して始めて五智は
 開顯せられ無相三密の胸上に三祇の修行を一念に超越して現在に於て直ちに成
 佛することが出来るのである。
 又この五大に就ては修生本有の二儀がある、修生の五大は父母所生因縁和合の五
 大本有の五大は無始無終本不生の五大である。

床堅觀文(傳記說)

我即阿毘羅畔欠

腰下阿字本不生

如、次、腰腹、心額頂

金色方形佛心地

勝輪、毘字、離言說、
 心上、羅字、無垢染、
 額下、吽字、離因業、
 頂上、欠字、等虛空、
 重重相累、無隔別、
 高下大小、本不二、
 帝網、瑜伽、遍法界、
 不改、自身、名、即身、
 丁度、太陽、がその光に依て、太陽自らの本體を顯現する如く、此の床堅觀と云ふのは、
 上來述べた如く、大日、五大の體性、即ち五輪を以て、一如の佛位を知覺するのである。
 自身の五大、そのまゝなるを、即身と名付け、その五大を智覺するを、即佛と名付ける
 のである。即ち云ひ換へれば、五大の當體やがて、眞如、大空に外ならぬことを、觀念す
 るのである。

白色圓形、大悲、水、
 赤色三角、大智、火、
 黑色半月、大力、風、
 青色團形、大空、輪、
 如如一體、不雜亂、
 彼此橫堅、輪圓足、
 心佛衆生、無差別、
 覺悟、此分、爲成佛、

十二、峰中閼伽水

閼伽とは梵語である。譯して無垢と云ふ。水のことである。水は萬法の根源であつて、
 本性清淨の徳を有つてゐる。故に諸佛は水を以て性と、衆生は水を以て體として、
 ゐる。水には亦五智の理用がある。水は澄寂にして萬物の姿を顯現する徳用がある。
 これ一つ、大圓鏡智である。一切の萬像水中に影現して、高きなく、低きなく、甲乙差別
 がない。二つ、平等性智である。一切の色相水中に移つて、明了の差別を現はす。三つ、妙
 觀察智である。一切諸法水に仍て生長する。四つ、成所作智である。水は何所に行つて
 も、遍からざる所がない。五つ、法界體性智である。以上水に五智の徳用がある。又水は
 風に仍つて波浪を起し、波浪は聲をなす。これ五智説法である。
 入峰修行に於て、本來清淨の水を汲んで、衆生本具の五佛を顯はすのは、これ三密智
 眼の表示、五智本徳の妙行である。水を以て五智に喩ふるのは、鑲の一字が五智を具
 足することを明す、一字所成鑲字法界の塔婆、即ちこの意味の表示である。秘歌に
 曰く

バサラダや、字は水の流れて

結んでかたに、

又關伽桶は双圓性海の本源胎金理智の二水を表示したものである(右は金界智差別左は胎藏理平等で右は父左は母である)
又擔木は一切衆生二鍍和合五大所成の三摩耶形である、毎日三荷の關伽水は毎日三時供養の法華水である

關伽水の頌に曰く

以、鍍字淨水、洗浴煩惱身、五智、德顯現、心諸佛圓滿、と
又裏書に曰く探燈は五佛の三摩地に住して之を修し關伽水は五智の理德に住して之を修すへし探燈はこれ滅罪の法、關伽水は是れ生善の法なり所謂火能く物を焼いて滅盡し水能く物を潤して生長すと

十三、峰中灌頂

峰中灌頂は主伴相對して法體の大日を移す修生灌頂ではなく兩壇本有無作の灌頂である。

萬法五大流出の根元たる鍍水を灌と云ひ六大能生阿字不生の心地を頂と云ふ。天地即ち兩部の道場であり自身全く大日如來であるから地水火即ち床堅本有の印を身密となし風空即ち口門出入十界本有の明を語密となし識大即ち柱源を意密となす故に如來の三密と衆生の三業と全々差別がない、これを無相三密と云ふ、この三密觀に入つた時に手を舉げ足を動かす皆法爾無作大日如來の印明となる、則ち峰中灌頂は六大法身惠命相續の法味無相三密依正一體の傳法である、これ傳にして不傳授にして不授であつて無相の法門たる以所の深義はこゝにある、秘記に曰く峰中灌頂とは行者又顯密禪の三宗一致具足の形儀と心得べし床堅とは大日如來の三形なるが故に密宗なり客料とは釋迦如來の三形なるが故に顯宗なり飲食便ちこれ禪宗なり、頭陀迦葉の枯花微笑法喜禪悅食之を思ふべし云々と灌頂啓白の文に曰く夫れ當峰とは金胎兩部の淨利無作本有の曼荼羅なり森々たる嶺岳は金剛九會の圓壇鬱々たる巖洞は胎藏八葉の蓮臺山河草木は全く遮那の直

體嶺嵐谷響は自ら法身說法なり三部の諸尊濟々として羅列し無數の聖衆奇々として安座す故に十有色聲見聞を顯はす法爾の境智有空に絶す既に知りぬ法爾自然の曼荼は三密瑜伽の靈峰なり爰を以て高祖役の聖者内には毘盧本覺の内證に住し遠く歩を岐嶺に運び即身頓悟の秘法を修す外に龍樹大士の印璽に依つて遙に跡を當峰にトして飽まで南天の開塔玄風を弘む真に顯密の行業一揆事理二法冥契なり貴き哉法の中の秘法深秘の中の極秘なり此峯に入る輩は薄地底下の凡體を改めず忽ちに胎藏八葉の中臺に登る此地を踏む者は父母所生の肉身を轉せずして全く金剛不壞の法身を證す況んや亦一の事業皆悉く如來の作業各々の名目即ち是れ秘密の眞言なり當に知るべし語默玄微を失はず動靜法界に離れず凡そ眼に單び難しと雖も佛智惠光豈生佛の隔あらんや汝等淺慮短智を以て法性の源底を疑ふべからず若し爾らば本分八葉自然に開敷し心中の阿字法爾として顯然たり修し易く證し易き道の入峯の行に超ゆるはなし誠にこれ事理俱密内證不二一心の妙行なり今新客等口傳若し此の制誠に背き顯露せしむる者は兩部界會の諸尊を始め奉り殊には金剛童子滿山護王善神別しては當峯開發役行者並に

代々諸大先達尊靈等の御罰立所に於て蒙るべきものなり仍て高祖誓誠の旨斯の如し云々と、
 峯中灌頂の血脈は峯中に碑傳を建立して密法相傳の表示とするのである碑傳とは胎金兩部五大法界の塔入峯密法相傳の血脈である。
 石に彫るを碑と曰ひ法を續くるを傳と曰ふ石は即ち阿字不變の實體名は即ち鐵文不壞の碑跡である他宗常途の朱脈を以て血脈となさず不變不壞の碑傳を以て血脈とするのである。
 傳記に曰く修驗血脈は全一圓相なりと一圓相とは師資不二鏡水色心和合六大初後一際法界塔婆の體性である。
 何故に密法相承の證明を以て血脈と名付くるかと問はゞ則ち答へん雙圓性海鏡水に於て一氣相續の處を峯中灌頂の血脈となすなりと
 更に深く知らんとするものは道に入つて面授を受くるがよい
 本山及び當山檢校の碑傳は左の如きものであつたと云ふこれは大峯小篠に建立するもので山主代々一代一度宛入峯の際に建立したものである、

本山修驗山主小篠ノ碑



文化三年八月吉日
熊野三山檢校三井長吏役優婆塞正嫡聖護院宮二品盈仁親王

當山修驗山主小篠ノ碑



金剛藏王 胎藏權現
大峯當山東寺檢校長者醍醐山主理源大師正嫡三寶院門跡法務前大僧正高演

其他一般の先達の碑傳には三種の差別があつた一には胎藏界の碑傳(春峯順峯)二には金剛界の碑傳(秋峯逆峯)三には胎金不二の碑傳(夏峯順逆不二峯)である。



大歳ま子 八月上旬
金剛藏王 當峯鎮護 正大先達房號實名何度 地伏分

胎藏界春峯碑傳



大永三年 當峯擁護 宣度初先達院號實名 地伏分
熊野山大權現 度衆何十人 新客何十人

夏峯胎金不二碑傳は太歳の甲乙に随つて造立する種子は^{うんじ}字を用ゐる。これは面授を要することになつてゐる。碑傳の長さ^た五尺^た五尺^たの五大を表はす但し冠と地伏の分とを除く横九寸^た金界九會胎藏の九尊を表はす厚さ五寸は横の五大を表はす金界碑傳の冠が^{けんぎやう}鋼形であるのは金剛鑲字の智體を表示したもので又胎界碑傳の冠が方形であるのは胎藏阿字の方形を表示したものである。

十四、大採燈護摩

大採燈とは衆生の大骨を表示したものの護摩とは焚燒の意味である。煩惱の薪木を積み智慧の火を増し有爲の支分を集め無畏の悉地を成就する深意に據るのである。大日經疏に依ると護摩に内外の二種ありとしてある護摩はこれ燒の義なり護摩に由つて能く諸業を燒除す一切衆生は皆業に従つて生れ生に由つて業を轉ずるを以て轉回已むことなし業を除くを以ての故に生も亦除くを得即ち是れ解脱を得るなり若し能く業を燒くを名付けて内護摩と曰ふなり如何なる所に従つて

解脱を得るや謂く煩惱業苦に従つて而して解脱を得るなり既に世間を離るれば即ち種子を生ず所謂白淨の菩提心なり世間の火の如きは若し物を焼き己つて但し灰燼と成す今は則ち爾らず既に一切の煩惱を焼くこと切燒の火の如くにして遺餘あることなし而して亦此の中より芽生するを得所謂菩提心の芽なり此中の能燒は即ちこれ智なり前の所説の如く羅字を觀せよ周匝して火蓋あり此を想ふて其身を周遍せしめよ其身又刀及び索を持せよ此の羅字門を以ての故に諸業を盡し諸障を淨除するを得業障を淨し己つて白淨の種子を生ずるを得るなり是の故に次に菩提の心を觀ず當に知るべし菩提心種子を生ずるを得るなり此の如く觀する時當に縛字を一切の身分に遍じて其毛孔の中より白色の甘露を流出して十方に周遍し以て一切衆生の身に灑ぐと想ふべし能く常に種子をして漸次に滋長せしむべきなり次に外護摩を釋せば其れ三種あり一には本尊二には眞言三には印なり一に本尊とは本尊なり供養のための故に之を置く所宗の門に隨て之を置く或は火の中には是の曼荼羅の位あるべし更に問へ二に眞言とは爐なり火を置く所なり此れ即ち眞言なり火中にあるなり三に印とは印なり即ち是れ阿闍

梨の座所なり自身即ち是れ印なり當に外護摩を作すとき此三位をして正しく相當せしむべしこの三は亦是れ三業を淨むる義なり本の三位とは謂く身と爐と本尊との三位なり各々三位あり本尊と眞言と印となり三業を淨めて三事を成すなり尊はこれ意業眞言は是れ口業師身の印は是れ身業なり此因縁に由つて能く三業を淨めて三事を成す謂く息災増益降伏なり三業道とは道は是れ會の義なり言く理と同じきなり同の故に會なり汝等の所行は是れ菩薩道とは即ち是れ三道同じく一致に歸するなり又三事字を觀する事各々異なり若し息災を作さば囉字を觀す當に上に點を加へて白色に作す増益には覽字を想へ黃なり降伏には覽字を想へ或は黒或は赤なり字の如く本尊及自身の色も亦是の如し三事相應して即ち成すなり就中復た上中下の差別あり謂く息災を上と爲し増益を中となし降伏を下となす此の如く作すことは外護摩と名づく當に知るべし此の内外の護摩を皆殊勝と名づく若し此れと相應せざれば徒らに作して益なし猶外護摩を作すが如し故に能く内護摩の中に引入せしむ然れども内外の理本は差別無けれども世間の成就を求むる者のために此の分別を作して外護摩を作さしむのみ若し此に異

して作すものは謂く所説の方軌に依らず當に知るべし此人は知解する所なし其功を唐捐して果報あるなし眞言の智を離るゝに由て己が無明の心に墮して而かも妄に之を作す終に世出世間悉地の果を得る能はず故に果を得ずと云ふなり又建立曼荼羅護摩儀軌にも護摩に略して二種あり謂く即ち内と外となり内護摩と言ふは彼の諸の衆生は皆業より生ずる所なるを以て業を淨除すれば即ち是れ解説を得能く故業を焼くは所謂菩提心なり名けて内護摩と曰ふ彼の世間の火の如きは物を焼いて灰燼と成す今此れは則ち然らず己が猛利の智をもて一切の煩惱を焼くこと切焼の火の遺燼あること無きが如し三處同一體なり大壇即ち護摩なり護摩即ち己身なり己身即ち火天なり火天即ち大日なり身口意和合して三平等にして異なし三身を具足して量法界に周遍せり生ぜず亦滅せず言を離れ言相を離れたり生と無生と大日尊に非すと云ふことなし阿字門を觀せよ云々とある即ち一切衆生は業煩惱から生じて來るのである故に此の業煩惱を淨め除かなければ解脱を得ることが出來ないのであるそこで此の業煩惱を充分焼き盡さんとする觀念法が内護摩觀である火壇と自身と本尊とは平等不三であつて少しも異

なる事がないのである。三身具足して十方法界に週遍しその量同じくして生ずることもなく滅することもなく一切の相即ち現象界を遠離超越して寂然不動である。一切の法は本より不生である故に猛利の智火に入つて業煩惱を焼くに何等の遺除もない。火天若くは本尊の口に投じた供養物は内證心蓮の臺に至つて心より身に行き渡り遍身の毛孔から供養の雲を流出して盡空法界の佛及び賢聖衆に供養し光明に觸るゝ所の三惡道の諸有情をして苦を息め身心を安樂ならしめ自身の業障を消滅して悉地を成じ其他一切の有情の無明の柱机十二因縁の故業等を焚燒して更に眞如法性の理體を顯現するのである。——斯様な内觀に入つて始めて護摩の趣旨は成就するのである。又修驗護摩觀には想へ修驗焚燒は法界を以て道場となし虚空を以て爐壇となし身口意を以て限量となし音聲を以て眞言となし智慧を以て火體となし印契を以て事相となし妄執を以て乳木となし浮報を以て香藥となし等覺を以て相應となし法身を以て如來となす最正覺道菩提心なり將に今火天を以て口となし囉宿を以て身となし本尊を以て意となし諸尊を以て毛孔となし普世天を以て兩足とな

す是の如く觀じ了つて事相を用ゐるす利他の要となすとある心をひそめて深觀すべきである。

不動を以て護摩の本尊とするのは此の尊の本誓悲願が護摩の本尊に相應してゐるからである。不動と云へば直ちに護摩を連想するのは元より離るべからざる深理あるからである。

護摩に息災増益敬愛調伏鈎召延命の六種ある。眷間行はるゝ所のものは多くは息災護摩である。息災を四種に細別して滅罪息災、滅苦息災、除難息災、悉地息災とする。而るに探燈護摩なるものは修驗一流の護摩である。唯單に一個人の息災等に修するチツボケなものでなくて實に天下泰平國家安穩の趣旨に據るのである。即ち全世界の和平のために修する護摩なのである。俗に大護摩と云はれるのはこれがためである。壇木を積んで之を梵燒するのは五大所成の身土を斷燒して本有阿字法界に歸せしむる表示である。

即ち探燈護摩は死滅の表義、滅罪の表示である。而して護摩壇の側には關伽水を置いてあつて灌ぐのだが此の關伽水は生の本源であるから生善の表義である。そこ

で護摩と關伽水とは密接な關係を有つてゐるのである。悪いものや害になるものは燒いてしまつてこんどは善いもの爲めになるものを發芽させやうとして水を以て培ふのである。即ち滅罪生善の意味が出て來るわけになるのである。

元來入峯修行なるものは皆胎内(斑蓋胎外)正灌頂(生起關伽)死滅(探燈)等宇宙輪廻の眞理人類因果の法則等を表示した儀式に外ならぬのである。がその内でも探燈護摩の如きは最も莊嚴なる法儀であるのである。大低山上又は寺院堂塔の庭前に於ける野壇に於て修するのが法規になつてゐる。壇場の莊嚴には種々口傳があつて多種多様であるがそれらは後人の付け足しで役君時分のもは單簡であつて而かも意味深重なものであつたに相違ない。

此の修行には觀念が大切であつて探燈は五佛の三摩地に住し關伽は五智の内證に入つて修するのである。即ち東方阿閼如來の木を西方彌陀如來の金を以て斬り之を中央大日如來の大地に置き更に南方寶生如來の火を以て燒き更に北方釋迦如來の水を洒ぐと觀念するのである。これ無明煩惱の薪を燒き盡して本有五佛の心地に還歸せしめ五智の光明に浴せしむるの妙義である。これは事護摩に於ける

觀修の法則であるが次に理觀上の探燈護摩にあつては六大理觀に入るのである。即ち現字不生は生死流來を斷じず字の悲水は瞋恚の猛火を銷しず字の智火は愚痴の不淨を燒きず字の息風は貪慾の妄塵を拂ひ夜字大空は無礙真宮に歸しよ字の自性は金剛法界に逼すと云ふ内護摩觀に入るのである。

十五、不動明王

不動明王と修驗行者と最も深い關係のあることは上來述べ來たつた通りである。然らば不動とは如何なる尊か了知する必要があらう。所謂諸佛の顯れ方に三通りあるのである。自性正法教令の三輪がそれである。今不動明王に就て云はゞ大日如來はその自性輪金剛波羅密菩薩はその正法輪不動それ自ら即ち教令輪になるのである。故に此の三者は本來同一體なのである。唯舞臺が變る毎に裝束を更ひて現はれて來るに過ぎないのである。喻を以て云ふならば丁度一天萬乘の帝王が九重の奥深くましくして四海を統御し給ふは自性輪に當る攝政大臣をして文を以て治めしめ玉ふは正法輪に當る元

帥大將をして號令を天下に示し玉ふは教令輪に當る然らば教令輪身としての不動明王とは如何なる指命を帯びた權威者であるかその本誓種子尊形等流派に依つて相承の異はあるが不動明王とは前述の如く大日如來の變化身であつて梵名は阿耨羅耶多と云ひ譯して不動又は無動と稱す風動又は風重大聖不動明王聖無動尊阿闍羅尊と呼び密號を常住金剛と云ふ菩提心大寂靜に對して名付け奉りしものである。大日經疏に不動とは即ち是れ淨菩提心なり此の義を表はさんがためこの故に事に因て名を立つとあり覺鏡上人の釋に明王とは其體何物ぞ答へて曰く已身本覺の如來なりと説明してある即ちその體三世に亘り十方に通し三世常住不壞不反菩提心堅固の體なる故に不生不滅不去不來不一不異不斷不常である。種子暗字の深義こゝにある而かもその相に於ては十方法界を具し地獄に脱落しても損せず滅せず佛界に居しても高擧するものなし故にこれを不動と云ふのである。阿字本不生の三昧に入れば諸行悉く不生である故に不行にして而かも行である。行を息して寂あるにあらす行して而かも寂寂にして而かも動である故に動即ち

不動である。これ煩惱(動)即ち菩提(不動)生死(動)即ち涅槃(不動)等の深義ある以所である。
 或る秘傳抄に據る時は不動と云ひば金剛界九會の一印會最上の大日に約し無動と云ひば胎藏界因曼荼羅十三大院聖衆に約し無不の二字は金胎兩部であると釋してある。不動に佛部の不動(阿閼)と金剛部の不動とある。こゝでは専ら金剛部の不動に就て説くのである。
 抑も不動明王は菩提心擁護の本誓に仍つて暴惡大忿怒降魔の尊形を以て現はれて來るのである。而かも僮僕給使の相を現はし一切事業成辨の誓によつて現はれて來る尊である。故に辨事明王とも云ふのである。大疏に其身卑にして充滿肥盛なり奮怒の勢極忿の形に現はせ。これ諸密印の標幟相なり此尊大日の華臺に於て久已に成佛せり三昧耶本誓形を以ての故に初發大心の諸相不備の形を示現し如來の僮僕給使と爲つて諸務を執作すとあり大日經には不動如來使あり慧刀と網索とを持し頂髮左の肩に垂れたり一目にして而して諦に觀威怒にして身に猛焰あり安住して盤石に在す面門に水波の相あり充滿せる童子の形なりとあり安鎮軌

には四臂大忿怒身を作れ紺青色にして俱滿嚴嚴なり目口皆張り利牙上に出で、右劔左索其上二臂口の兩邊に在り忿怒に作り身八幅輪内に居るとある通り明王の體相に十界を具足してゐるのである。立像は金剛界座像は胎藏界に約す、これ横堅の義から來る義理である。
 さてその體相の青黑色は五大内の空大と風大との色であつて二大色共に慈悲の色相である。火焰は地獄の猛火、體腹肥滿はこれ餓鬼の相、火焰の中に迦樓羅鳥を現するは畜生を表はす、迦樓羅鳥即ち金翅鳥で此の鳥は龍を食物とす龍は煩惱に喩ふる故に火焰即ち智火を現じて衆生の業煩惱を焚燒する表示になる。忿怒の形を現するは修羅闘諍の相、右には智慧の劔、左には方便網索を持つてゐる。これ亦兩部を表はす劔は金剛界大日の内證索は胎藏界大日の内證である。即ち如來忿怒の命を承けて不降伏者を執繫し利慧刀を以て其業壽無窮の命を斷じ大空生を得せしむるのである。大空生を得せしむるとは阿字本不生不可得の眞理に通徹せしめ大智慧を得せしむるの意味である。方便網索と云ふのは金剛界三十七尊中の四攝智菩薩の第二索菩薩の三摩地であつて大日如來化他引入の方便である。其口を緘

閉せるは戲論の語風を息断するの意である。兩目同時に開き玉ふは兩部均等の表示であつてこれを大日不動と云ふ右目を開き左目を閉づるは釋迦不動と云ひ右の開目は佛界五智を開くの意左の開目は衆生界玄門を塞ぐの意である。即ち煩惱を閉ちて菩提を成ずるの意である。上下の牙齒は一は上求菩提一は下化衆生の意で金胎兩部の表義ともなる。暴惡相の内尙人間の相好をしてゐるのは人界を現はし手足に表せるタマキは天人の道具故これ天道の表示である。袈裟は福田衣母體衣那であつて聲聞緣覺菩薩の三界を表はす頂上の蓮花はこれ佛界の表示である。尊像中此の頂上の蓮花の有無に就ては相承の密意があるのであるが普通の尊像には大概蓮花のあるのが多い。これは一切衆生菩提心の表示即ち如意寶珠であつて菩提心を發する者を此の蓮臺上に安住せしむる悲願に據るのである。七把に結ぶ所謂七莎鬘は七菩提分を表はす。莎は草の名で大唐の兒女に莎草を以て頂髪を結ぶ風俗があつてこれを莎鬘と云つた。七結は七種覺よく果を成ずるの意味にかたとつたものである。が大唐七人の從者が天子の近邊を守つて奉仕したのにかたとつたものだと云ふ。或は又七代の主人に忠僕なりし相を像つたものだと云ふ。

ふ何故なれば此の不動明王は愛染明王が王者の三昧たると正反對に奴僕三昧であつて祈願する人の奴僕となりて殘食の供養をも喜んで受けてその歸依者の祈願を成就せしめて菩提の彼岸に引攝せしめやうと云ふ深重の大慈大悲の本願に據るからである。使者念誦法に此尊本願大悲身を捨て一切持誦者に奉待す身は奴僕の如く一目なきの相を現して此の殘食供養を受く行者若し食する度毎に心に忘れざるものは我當に晝夜常に隨つて擁護し諸魔毗那夜迦をして諸の障礙をなさしめざるべし意に隨つて速に滿成就せしむ云々とある。

左の辨髮が肩の邊に垂れてゐるのは一切衆生を一子の如く愛護護衛し玉ふ平等の慈悲を顯はす額に水波の皺あるは底哩軌に眉を蹙め面瞋れる相は三世を降す狀をなすとある。通り大悲より發する忿怒であるが故に水波の皺は衆生をあはれむ悲愍の相である。盤石に座し玉ふ意は盤石は不動の義淨菩提心堅固不壞の妙高山の表示である。若し盤石座に海浪を表はす時は波はこれ諸煩惱及び九十九種等の外道の義であつて煩惱外道等も金剛の盤石を侵す能はざるの表示である。次に二童子に就て説明すると矜羯羅童子を恭敬小心者即ち善性となし胎藏の義

とし制吒迦童子を難共語者即ち悪性となし金剛界の義とし不動明王の智慧と福徳との二使者となす中央不動明王は金胎兩部の不二身となる。

不動使者法に是の大明王を以て持せんと欲するものは四種の精進行を行して自ら身心を約めよとある四種の精進行とは斷食服氣食菜節食を云ふ身命を惜まざる行法なる故にこれを捨身の修行と云ふのである使者念珠法によれば行者が捨身修行をすれば本尊も亦身を捨てて行者に奉持し守護するとあるその靈威の偉大なる正報盡きし者をして能く六ヶ月の命を延ばしむるが如き仰信の外はない立印軌に法成を驗せんと欲せば能く樹枝をして摧折し能く飛鳥を墮落せしめ河水能く竭きしめ波池枯涸せしめ能く水をして逆流し能く山を移し及び動かさしむとある役行者が一言主を秘縛した如きは全く明王の威力に據るのである。

即ち不動明王は慈怒身を現し衆生の機根に應じ或は順を以て勸め或は逆を以て制し自由自在に教化する所の大慈悲深重の尊であるのである即ち不動明王とは吾人の本有無垢の真心無傾動の名である其本地心は大日經には大日如來の所變なりとし使者法には釋迦としてあり立印軌には金剛手八大佛頂軌には除蓋障仁

王軌には金剛婆羅密の所變であるとしてある。

十六、金胎兩部

大日如來 金剛界大日一堅一智差別一心一精神一識大一大智一陽一父一佛一結果 二而不二

胎藏界大日一横一理平等一色一物質一五大一大悲一陰一母一衆生一原因 二而不二

大日如來即ち宇宙の本體を横堅原因結果の兩面から觀たのが金剛界と胎藏界の兩部であるこれが不二心の曼荼羅である。

金剛界とは梵語の縛曰羅駄都で縛曰羅は金剛駄都は界の意味であるこれには堅固不壞利用摧破の二つの意義がある前者は自體そのもの徳後者はその作用の徳であつて煩惱を破つて真理に至るの謂である秘藏記に界とは身なり金剛を持するもの身なり身は即ち聚集の義なり一身に無量の身を聚集する又持の義なり此の金剛の身は三十五佛百八尊乃至無量の佛を堅持すると云ふは一切の佛も亦此の如しと説明してある又播鈔に界に二義あり一は性の義二は差別の義なり初めに性の義とは曰く一切有情の身中に本來毘盧遮那體性の功德を具足す故に

性と云ふ二に差別の義とは曰く毘盧遮那體性の海中には不可説不可説の賢聖各々不同の故に此の如く無邊海會の功德一切凡聖の身中にありて堅固不壞なること彼の金剛の如しとある即ち此の金剛界の法門は因より果に入る修行の法則である。

胎藏界とは梵語では羯婆俱舍達磨と云ふので羯婆は胎俱舍は藏達磨は法である。攝持の義又は含藏の義である凡夫も佛性を含藏してゐると云ふ意又佛となりて一切衆生を教化する徳を攝持してゐると云ふ意である大日經疏に且らく胎藏に約して喻を爲さば行者初めて一切智心を發すは父母和合の因縁を以て識の種子初めて胎中に託する如し爾の時漸次に増長して行業の巧風の爲めに匠成せられ乃至始めて誕育する時諸根百體皆悉く備足して始めて父母種姪の中に於て生ずるは猶眞言門に依つて大悲萬行を學んで淨心顯現するが如し又此の嬰童漸く人の法を具し諸の伎藝を習ふ伎藝已に通じて事業を施行するは淨心の中に於て方便を發達し自他を修治し縁に隨つて物を利し衆生を濟度するが如し故に大悲胎藏生と名付くなりと又播鈔に一切有情の身中に本より以來不生不滅の理あり謂

ゆる八分の肉團如來藏の體なり此の清淨の理を指して胎藏と名付く然れども凡夫位に在つては未敷蓮花の如し煩惱のために纏縛せられて六趣に輪廻し自身は是れ佛の理なるを知らず是の故に大日如來法界胎藏の三昧に住して頓機のため三世常恒に此の祕神通教を説き給ふ即ち大日經これなりと説いてある即ち此の胎藏界の法門は從本垂跡であるから逆に果から因に入る修行の法則である。

十七、三種即身

顯宗には正了縁の三因佛性を説き密宗には理具加持顯得の三種の成佛を立てるが修驗道に於ては三種即身の義を立てる一には即身成佛始覺二には即身即佛本覺三には即身即身始本不二の三身である一と二は生佛對辨の義であるが即身即身の説は修驗一流の極理である即ち一心眞如海中に於ては神とか佛とか云ふ名義はなきのみならず(假名に過ぎず)實相般若皆空無所得の大眞理の前には邪もなく正もなく善もなく悪もなく一切皆同一點に歸着し自然そのまゝの實相直ちに以て大空眞如の當體に外ならぬ故に造次顛沛も即ち無作三身の直體語默動靜も

即ち無相三密の妙用である。修驗道切紙發題に「夫れ諸佛の法脈は人に從りて得るにあらず衆生の靈機本と自ら轉ず是の故に妄を逐ひ眞を求めて轉た眞を失し心を説き道を唱へて却つて道に違ふなり君見すや竹密して妨げず流水の過ぐることを山高ふして豈白雲の飛ぶを礙げんや所謂語默動靜行住坐臥山河草木走獸飛禽一一天眞一一明妙全く是れ眞如三昧なり云々と此の觀解内證に入り無相三密の奥意に徹した時姪慾酒肉をも不淨となさず諸法空相不生不滅不垢不淨なれば却つて清淨の本源となり有相憑文印明等の方便を絶した自然そのまゝの相直ちに以て毘盧萬德圓明遍照となるのである。これ常境無相常智無緣の内證であつて修驗即座の正覺當位佛果の源底である。無相勝慧の機根者に非ざれば説くも甲斐なき極説である。

十八、即神即佛

修驗三身即一流儀に

即身即佛 即身即心
 即身成佛 即神即佛

又講式の頌に
 即心成佛 即心即佛
 即身成佛 即神即佛

本體盧舍那 久遠成正覺
 爲度衆生故 示現大明神

即神即佛即神佛同一體の説に就ては本迹神道説と兩部神道説とがある。聖德太子の釋氏憲法第十二に大乘は高地と知つて貴んで菩薩となす吾國は神國なり佛の本神あり佛の跡神あり小乘は國理すること能はず唯大乘を學んで専ら神明を敬へし宣はせられてあるが此の説を徹底させたものが本迹説である。抑も吾天祖太神の體性は天地本源の眞理たる無我絶對の眞如に外ならぬ此の眞如絶對の中から顯現し玉ふ神明である故に神明の本性は即ち眞如であつて眞如即ち神明の本體である。然るに亦三世の諸佛十方の菩薩も此の眞如の中から出現して來るのである。即ち神明は眞如本地の位であつて三世の諸佛は此の眞如法身の本神から出現し玉ふ影像垂迹である。これ佛の本神ありの意味で又三世諸佛は

皆此の眞如絶對の理を覺り眞如と體を同ふして眞如の中から世界に出現し而かも常に眞如の中に在住し或は眞如の中より來り(如來或は眞如の中に去る(如去)のである此れ神明は皆此の眞如來藏の中から出現して蒼生を利益する神明である佛の迹神ありの意はこゝにあるこれ神即佛の玄理であつて古來修驗法印が神社の別當職となり神前に於て護摩を修し大般若法華等の佛經を奉讀して神明の威光を増し國家鎮護の法樂を修したる以所の深意は斯様な次第に因るのである次に兩部神道とは専ら弘法大師が徹底させて相承した説で天照太神の四種曼荼羅即ち毘盧舍那遍一切身の四種曼荼羅身に異ならずと習ひ傳ふるものこれで内宮を以て胎藏大日とし外宮を以て金界大日と傳ひ習ひ又高天原とは都室内院即ち法界宮殿密嚴國土の内證なりとするのである。

十九、修驗の衣體道具

修驗の衣體道具には種々あるが概して肝心なものには十二種乃至十六種ある。その中頭襟班蓋鈴繫結袈裟法螺念珠錫杖緣笈肩箱金剛杖引敷脚半等を十二道具と

しそれに檜扇柴打走索草鞋を加へて十六道具となす其他太刀長刀弓矢斧闕伽桶水瓶小木取壇箒木體比小打木花盤鈴誓海白銅桶本尊等様々ある。こゝでは十二道具を解説するに止める。



頭とは衆生無明所生の頂上襟とは衆生無明能生の妄心なりと古釋にある通り頭襟とは云ひ換へると大日如來の寶冠であつて五智圓滿具足を表示したもので寶珠の形に造られてある。この寶珠形たる五智寶冠即ち頭襟に十二の裝を取つて眞中の一處で括り上げてあるのは十二因縁結集の意味を表はしたものである。その黒色なのは無明煩惱黑暗の標示である。修驗行者がその頂の前八分あたり之を着けるのは不動明王の頂上にある八葉蓮華臺に像るからであつて無明と云ひ煩惱と云ふも悟れば本來空であつて菩提清淨に外ならぬと云ふ深旨に據るのである。何故に十二因縁を以て五智寶冠に象徴したかと云ふに吾々の生死に十二の因縁があるが要を云へばその十二因縁なるものは煩惱と業

と苦との三つであつて煩惱とは過去の迷ひ業とは現在所造の悪業苦とは未來所感の罪苦である所が修驗道に於てはこれら煩惱業苦の三道そのまゝ三徳秘藏の妙理たることを證得する道であるから十二因縁生の流轉を動せずしてそのまゝ十二聖位の果徳を開くのである故にこれらの深義を顯はさんがために無明等の十二因縁をそのまゝ表示して頭上に戴くのである。これ明暗一體凡聖不二の表示である。

又小頭襟と長頭襟と云ふのがある。小頭襟は地の長さ一尺八寸十八道を表示したもので根境識の三つが和合して縁起の當體を改めす直ちに大空不生の法體に歸入するの意味である。長頭襟には二つの種類ある。一は螺髮形と云つて長さ五尺大日如來の五智にかたどり又佛身相好の螺髮にかたどり法身不變の黒色にしてあるこれは前額上に結ぶ。これを着けたのを佛部山伏と號し優婆塞形の山臥が着用することになつてゐる。二は滿字形と云ふので長さ八尺不動明王頂上の八葉蓮花にかたどり色は含字黒色で頭の後方に之を結ぶ。これを金剛部山伏の所用とし。摘山伏之を着用する例になつてゐる。

又折頭襟と云ふのがあつて、これに二種ある。一は捲頭襟と云ひ上求菩提の表義他は下頭襟と稱し下化衆生の表義である。又羽頭襟と云ふのも用ゐる。俗に罽九帽と云ふやつで増譽大僧正が白河法皇熊野御幸の先達を勤めた時始めて用ゐたと云ふのがこれである。

斑蓋(一名アヤ笠と呼ぶ)



斑蓋とは慈悲覆護の相即ち佛界莊嚴の天蓋である。天蓋とは吾等衆生が悲母の胎内に宿つて胞衣を戴いてをる表義である。秘訣に胞衣とは胎内に於て始めて迦賴藍の位より終り鉢羅奢佉の位に至つて赤子の頂上に蓋はれ悲母飲食する所の胎内寒熱の毒氣を防ぎその肉身をして敗壞せしめず故に五位圓滿して速に出胎す。噫、悉くも乾坤陰陽の精氣を受けてより魂々宿胎の時、頂に在つて産生神と名付け出胎の後、立増神と號して衆生を守護す宛かも眼精を護るが如し、即ち是れ大日如來の變化三世荒神の應用なり之を崇むれば、則ち諸善速に集まり之を輕すれば衆惡忽ちに起る。然れば、則ち荒神の妙體全く自性の善惡を出で

す毘盧身土本より衆生の色心にあり凡聖の名字異なりと雖も内外の因縁惟れ同し此の如き深徳を顯了せんがための故に天蓋と名付け佛界道場の障難を禦ぐ爰を以て今入峯修行修驗の行者等彼の義分に準じて斑蓋と名付けて之を著すと又斑蓋とは其形圓相なり五位圓滿の義を顯はす周五尺徑一尺六寸七分頂上の八葉は母胎八分の肉蓮を像ると即ち斑とは五色混雜の相蓋とは頂上覆護の義である圓相なのは金界月輪の表示で白色の綾を以て之を裏む又八葉は胎藏八葉で赤地の錦を以て作る以上これ胎金本有の内證で二諦混合の秘訣を表示したものである又指蓋と云ふのは傘蓋のことで檜笠は斑蓋の義相である修驗行者は何笠を用ゐても斑蓋の意味で着用するのである。

鈴 繫



鈴繫とは眞言具足鈴即ち金胎兩部の曼荼羅を表示したものであつて入峯修行の法衣である鈴は五股鈴を指す五股鈴は大日如來の三昧耶形で衆生の六大を表示したものである五股形は金界五智胎藏八葉で鈴舌は音聲即ち金胎不二自性法身の説法

を表示したものである故に鈴は行者の六大地水火風空識阿字の寶玉語を換へて云へば自性天然の心身である五智即ち五大八葉即ち心蓮音聲即ち意識である即ち鈴繫とは阿字不生の寶玉を以て金胎兩部曼荼羅直質の衣裏に繫けて一乗菩提の靈峯を修歴するから斯様な名稱を付けたものである資道什物記に華嚴經に曰く東方に山あり金剛山と云ふ一の菩薩あり號して法喜と云ふ千二百人と與なりき而して説法をなす云々所謂法喜とは役行者の密號なり菩薩の本誓元より衆生を度せんがための故に行者曾つて笑面山の瀧穴に入りて瀧樹菩薩に値遇し奉り觀面に本有灌頂の法を相承すその時大聖無價の寶珠を以て役氏に授く終に淨土を辭出し日域の靈窟に經行して本有の密法を修念す普く群生を利し既に行願を成せり而して後箕面山に於て坐禪入定す時に又寶珠を以て弟子に付す弟子等これを呼んで鈴と稱す其形鈴に似たるが故なり鈴杵と云ふは理智不二の内證音聲とは自性法身の説法なり是の故に鈴と云ふは即ち六大なり六大と云ふは法性眞如の寶珠なり繫とは繫著の義なり法性眞如の寶珠を以て兩部直體の衣裏に繫ぐるが故に寶珠と云ふはこれ本有の理衣裏と云ふは即ち

凡夫の色然ればその衣相黒色なるものは即ち不變真如の義なり是を心性不動無相法身の位となすと釋してある。

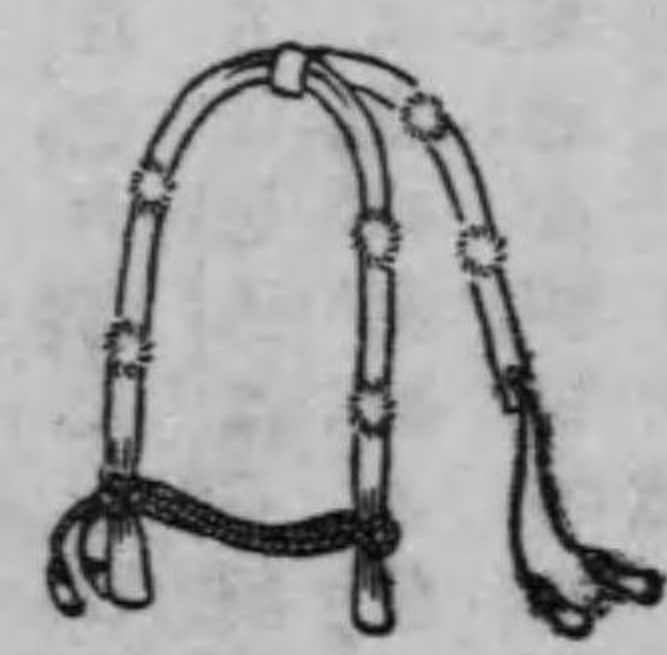
次に摺衣と云ふのは不動明王の大盤石を顯はさんために石疊を衣紋に摺つたものである何となれば修驗行者は自ら不動明王の三昧に安住して不動法性の心地を示すからである衣紋に青或は黒の二色を用ゐるのは風空の二色に像つたもので則ち不動は空を以て體とし風を以て性とすからである不は空である動は風であるこれ不動と行者と一體不二の深旨を現はさんためである。

次に柿の衣とは赤色無紋で母胎肉團中に住する姿である資道什物記に柿衣とは我等衆生母の胎内に宿り血中に住して五位を経て出現し初めて佛法修行に趣き將に父母の重恩を報し衆生を利益せんとす故に彼の血相を表はし赤色に染造し此の體上に繋けて以て柿衣と稱す不苦不樂の極位と云ひ本有本覺の大日と名付く即ち内證行者の相貌なりと説明してある。

法衣なるものは腰から上は金胎兩部の六大嚴身の上服で上の九布は金界九會腰から下の裳は八布即ち胎藏の八葉で裳を縮むるは萬行一致若くは諸善積聚の意

味で行者之を着用すれば金胎兩部不二の位を示す譯になる。二露は福智の二嚴左は福德莊嚴觀音右は智慧莊嚴妙音に擬へ二解は愛染不動の二明王吾即ち大日如来であるこれを一佛二明王の秘觀となすのだ袴の裳の後の三變は三惡道前の六變は六波羅密の表示則ち三惡道を背にして六波羅密に向ふ意味である貫を結ぶは萬行一統の修行を現はす八級は八供養菩薩又は八正直道の意味全部で十二相を顯はしてあるのは十二因縁の意味である。

結袈裟



結袈裟は修驗専用の袈裟で三衣の中の法身衣則ち九條袈裟である九合は九條九結は九界で九界を九條に接し行者之を着用すると九條は九界となり行者は佛界となるから十界一如三身圓滿の妙理を表現する譯になる同時に亦十界本具の内證は不動の妙體にもなるから此の結袈裟を十界具足袈裟又は不動袈裟とも稱する傳記に凡そ結袈裟とは其形を顯はすに山の字を結ぶ三股頭とは三身獨古形とは即一なり三身即一の深義之を思ふべし次に條の間四尺二寸なり住

行向地等妙の二覺四十二位の階級を表す前の左右各々四六五なり後の三五四合して四尺二寸なり獨鈷形三寸は三界唯一心の義を標すとある。
 白色六房なるは白色は隨緣眞如の義で六房は六道地獄餓鬼畜生修羅人天を表はす白色の房は黑色は不變眞如の義で六房は六道地獄餓鬼畜生修羅人天を表はす白色の房は隨緣利物の位で恰かも白色は種々の色に變ずるが如く眞如法性は縁に隨つて果徳を現はすの深旨に因つたもの、黑色の房は自證獨滿の位で則ち獨尊で恰かも黑色は他の色に變化しない如く菩提を證得するの深意に因つたものである、又白房の袈裟は逆に之を絞るこれ下化衆生の義、黒房の袈裟は順に之を絞るこれ上求菩提の義である。
 威儀線とは二尺五寸で前一尺後一尺五寸則ち二十五有の表示である。
 又磨紫金袈裟末志古一狼子とは打越あり結であるから打緒である、そして打緒の中頃一所を結んである廣量一寸八分十八界を表はす前に二金の房がある、後に三金の房がある前に三條後に四條打緒に二條これを合して九條である、條の間打緒共に四尺二寸である、威儀線二尺五寸である、五金の房は五波羅密五色の錦は五道

を表したものでこれ能所相應の義である、要するに表儀は結袈裟と同じである。
 元來袈裟とは梵語で翻して不正色又は六舎と云ふ、一に怖魔二に淨戒三に聖威儀四に破惡五に淨命六に尊貴で此の六徳を具へてゐるから六舎と云ふのである、大乘の菩薩戒である故に忍辱慈悲を表はしたものである。
 結袈裟に就て心鑑鈔に次の如く述べてある、所謂結袈裟とは元福田衣なり役老山中に住すること久しきが故に袈裟風雨雪霜のために破壊せらる、その時一の故猿來つて葛藟を結んで破壊する所の袈裟を六つに分つて節所に結んで以て小角の肩上に納む、小角敷して曰く嗚呼汝形猿にして意猶人の如し是の如きの畜生菩提心を發す人身に生せよと謂つて掌を指し玉ふと云つてある。



法螺

法螺は金界鏤字の智體法身說法の内證である、文にも法螺とは聲字實相の内證、金界果分の法門なり故に三世の諸佛番々出世して說法大會の砌大法螺を吹いて三界の天衆を驚かし一切衆生煩惱の眼を醒して悉く法性中道

覺位に歸せしむとある如く如來の説法を以て獅子吼に譬ひ法螺を吹奏して以て獅子吼に擬するのである則ちこれ法螺は大法を宣説する意味云ひ換へれば覺醒の獅子吼である秘記に金剛三昧の螺を立てて生死長夜の眠を覺し聲字實相の音を發し自性心蓮の尊を呈す故に長眠の衆生之を聞て驚覺し永夜の群迷之に因て忽ち曉りぬ誠には法身説法の内證聲塵得道の本初なりとあり頌にも三昧法螺聲一乗妙法説經耳滅煩惱當入阿字門とある裏書に修驗具する所の引敷と云ふは既に獅子乘を表はす法螺音則ち彼の獅子吼の義なり故に所乘の獅子音を以て能乘の行者の道具となす螺を立てる名言全く獅子吼に依るの義なりとある

この法螺を吹奏する則ち螺を立てる遍數に定まりがある

入宿の螺 三音三音三音半合せて十音で十界隨類の説法を表はす後の半音は説法成辨の義である

出宿の螺 三音半二音半一音半合せて八音これ八正道の法義を説き八邪の迷路を斷する義である

駝相の螺 二音二音二音に之を立て合せて六音である入峯修行六度の法門に擬す

案内の螺 五音三音に之を立つ

返答の螺 三音五音に之を立つ

説法の螺 四音四音三音半これは四辨八音の表義である

法螺を立てる時に螺の口を三度撃つのは三身説法の表示である

又螺緒 これに就て二義ある螺緒は則ち獅子繫縛の寶索である獅子は無明の體寶索は斷惡の智根緒は五智小緒三尺七寸三十七尊赤色は智相を表はす緒大は水

指量でこれを鍔字形に結ぶ衆生所生の根源二滴和合の表示である臍輪右脇に緒

を曳くことは臍輪は水輪右脇は智方である共にこれ金界鍔字の智門を顯はす智

は如來説法の巧用衆生濟度の方便であるからである

最多角念珠

最多角は阿喇吒迦の訛りだとの説もあるが珠の形が多角形(劔形)をしてゐるから此の各稱があるのである念とは己心實相の智珠とは本覺真如の理で實相真如の



内證を念珠に像つたものである念は念々續起の煩惱珠は起念即法界の圓理である起念則ち法界の心地に安住する時衆生煩惱の當體全く周遍法界一念不生の覺體であるそれ故に起念即ち不生不生即ち起念であるから煩惱と菩提と一體にして不二である秘記に曰く念珠とは百八の珠なり百八煩惱を表はす四圍の數取とは衆生の四大に當る緒は則ち念々相續の風息に像るなりと百八煩惱とは六根各々亦六根あり六六三十六で過現未の三世各々三十六あるこれ即ち百八煩惱である珠の形多角形なるは智劍を表はす智は覺である覺は菩提である則ちこれ煩惱即菩提を表したる事が解る次に母珠は佛界緒留は衆生界を表はすこれ生佛均並の義を顯はす十個の小珠は十波羅密に擬し二露は福智の兩嚴を示す母珠から七遍に至る根境相對諸法了別の義である七遍に定めたのは眼耳鼻口等の七穴に像つたもの母珠から二十一遍に至るこれは三世覺滿の義である二十一遍から緒留に至る三十三珠は普門應現の三十三變を標示したものである一方は生界一方は佛界に擬す

次に念珠を轉ずる譯は轉凡入聖の意味又三寶に向つて念珠を摺るのは百八煩惱を摧滅して菩提の妙果を證得する義である念珠を摺すことに就ては異議もあるが修驗行者に於ては常に摺るを以て本義とする又修驗所持の念珠は十度珠であるが十大弟子珠のあるのを用ゐない吾祖大日如來は無相法身獨一無伴の位であるからである

錫杖



錫杖は法界の總體を表示したものでこれに聲聞錫杖緣覺錫杖菩薩錫杖の三種ある聲聞杖は輪が四つある苦集滅道の四諦を表はす緣覺杖は十二輪ある十二因縁を表はす菩薩杖は六輪ある六波羅密を表はす修驗所持の錫杖これである傳記に錫杖とは其形圓形相なり周圍無際の大虛を法る圓外に五輪あり法界塔婆を表はす(横五大)中央に三種の五輪あり心佛衆生の五大に擬す(豎の五大)是れ則ち三心一體已身實相の寶塔なり(横平等門)には法界大有五大九界を並べて隔てなく豎差別の戸には諸法を精ふして亂れず次に又四面に半月の形あり東西南北

の四刃を像る、左右の六輪は菩薩の修行六波羅密を表す、最下の柄六角は六道の巻に六波羅密の修行を以て能く六道四聖の群迷を濟ふ、謂く檀は餓鬼戒は地獄忍は修羅進は人間禪は天道智は畜生然れは則ち錫杖を振ることは六道輪廻の眠を覺して一切衆生を一佛海會に歸入せしむる義なりとある、又秘記には、入峯修行は菩薩六度の善巧、大悲代りて苦を受くるの軌則なり故に今修驗の行者等、各々大悲利生の錫杖を執持して、普く六道受苦して衆生を化度す、之に依て錫杖の聲を聞く者皆三業所犯の罪障を消滅し、速に菩提を證すとあり、則ち錫杖は迷暗の智杖であり貧窮の寶幢たる所以である。

錫杖を振るに三振は三界の群迷の長眠を驚かすの義、六振は六道衆生の長眠を驚かすの意、九振は九界迷情の長眠を覺醒して佛界に歸入せしむる義である。

縁笈

入峯修行の笈は胎藏阿字含藏の理、萬法總持の表示である、恰もその胎内に一切衆生を含藏して之を覆育する慈母のやうなものである、而かも行者自身斯かる妙理を具足してゐることを示すのである、則ち笈は華藏世界の表示であつて四方は母

の四大内の虚なのは真空の玄理物を納るれば寶藏の意味となる、次項に説明する



肩箱と合して兩部和合の深義を表はすこととなる、傳記に「山伏の笈は悲母の體相を像る、故に皮肉骨あり、謂く皮を以て之を裹むは皮なり、中心の穀味は肉なり、笈の板は骨なり、次に檀の板は胎藏曼荼阿字の方壇なり、上を八角に絡ふは母胎八分の肉團自性心蓮の八葉なり、赤色の笈索は一切衆生五蘊和合の血脉を表す、長二十一日尺なり、笈の中に五穀の種子を藏むは慈母の嬰兒を養育する乳味を表はす、是れ則ち五智圓滿の果實佛性萌動の種子なり、入峯修行の肝心秘密灌頂の深義最も此にあり」と。

又裏書に「笈の板は堅一尺八寸、悲母の十八界を表はす、一尺二寸、十二因縁を表はす、兩足各々一尺、凡聖互具の十界を表す、左の足は衆生所具の十界なり、右の足は佛界所具の十界なり、次に壇の板は堅一尺三寸、胎藏十三大院を表す、横九寸、金界九會を表はす」

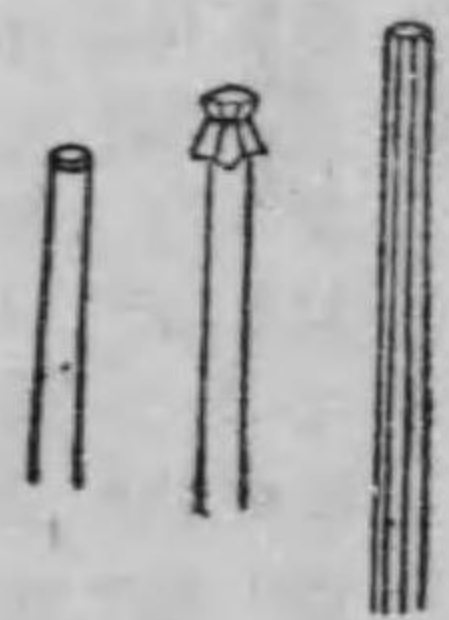
御口説に云ふ入峯修行の新客等各々笈を負ふこと我等本より母胎の中心に住する姿なり實に是れ衆生縁起の根源能所不二の表示なり甚深くと



肩箱とは金界鍍字の智藏峯中書箱の秘函で金界一切印會の中に六大本有の法身三密智德のあることを表はす傳記に肩箱とは定惠和合の姿虛心合掌の形なり虛心合掌とは凡聖不二十界一如の表示なり福智兼修し定惠並行す能く他の苦を濟ひ自らの樂を取り三利至等の徑路凡身即佛の實義これ乃ちこゝにあり則ち此の肩箱を擔つて入峯修行の輩は一切諸法修せずして之を修す一切の萬行修せずして之を行す誠にこれ諸佛已證の實函衆生頓悟の心藏なりとあり又裏書に肩箱とは破蓋なり虛心合掌の形を表はす笈肩に即ぐるが故に肩箱と名つく長量一尺八寸(行者の十八界)横六寸(行者の六大)高五寸(金界)五智次に白色の索は衆生鍍字の脈水自性不染の蓮絲なり(長量一丈六尺)上を蓮葉に絡むことは即ち蓮華合掌の形なり並に是れ染淨不二色心實相の所表なりとあり又秘記に曰く肩箱は金界鍍字の相なり金界

とは智曼茶羅の故に肩箱の中に峯中灌頂秘密の書箱等を藏む縁笈は胎藏阿字の形なり胎藏は因曼茶羅の故に笈の中に五穀の種子を藏む笈實は即ち此の謂なり因は種なり種は實なり能く能く之を知るへし。右一一の表揚は有相權假の事法を以て無相本理の實義を示す當に知るへし法界鍍字の表示極佛證智の境界なり甚深甚深と

金剛杖



修驗所持の杖に三種の別ある。一は金剛杖二は檜杖三は擔木である。一は度衆所持の杖即ち三杵の中の獨杵である。度衆持金剛の故に金剛杖と名つく傳記に金剛杖は金胎不二の塔婆役優婆塞の三形なりとある。上の頭は劔形で金剛鍍字の智體を表し下の四角なのは胎藏阿字の地大を表はし四方四面なるは發心修行菩提涅槃の四轉を表はす方周合せて五寸これ地水火風空の五大に像るその長量には定まりがない唯行者の身量に同じて定める即ち自身一字の鍍塔已體本有の阿字を示すのである。

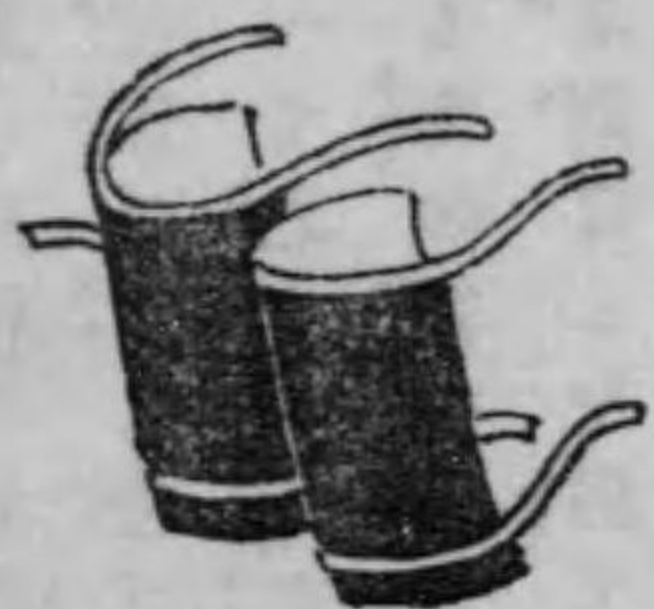
檜杖は正先達の智杖で形は寶棒圓形である、二利圓滿の表義である。檜は火である、亦火は智である。智は能く衆生の煩惱を照破すること恰かも火が薪を焼き盡すに等しい。故に檜杖と云ふのである。これ貧窮と福寶幢と六趣濟度の智杖である。檜木は初入新客の杖である、入峯初度の行儀に於ては峯中諸宿に際し初度の行者は毎朝三荷の闕伽水を汲み毎日三荷の小木を採るのである。故に初入の山伏等は金剛杖を以て闕伽や小木を擔ふのである。それ故檜木の名がある。



引敷は獅子乗を表はす。引は牽である。敷は乗である。これに二つの意味がある。秘記に一切の畜類愚癡を以て命とす獅子は衆畜の中の王なり獅子を以て元品の無明を取る故に三世の諸佛智母の薩埵獅子に乗して無明の諸戲を降伏し玉ふ、今入峯修驗の行者等獅子に乗して彼の元品の無明を斷じ法性直道に歸せしむなりとあり又傳記には修驗獅子乗とは自在度人無空過の義なり、其故は獅子は畜獸の中の王なり彼の音を聞いて一切の畜類悉く滅す、故

に獅子を以て智體に譬ひ畜類を以て無明に比す、然れば則ち智杖に策つて煩惱の魔群を破す、又慧劍を揮つて無明の惑縛を絶つ、誠には是れ入峯修行勇猛迅速の形利益衆生斷迷開悟の粧なり、駝と云ふ名義獅子乗に依るなり、以て之を知るべしと、こゝで駝と云ふのは入峯修行に與駝の作法なるものがある、其他駝相駝路駝副駝遠駝別駝越駝後駝透駝駐なる名稱がある、これらは實地に就ての修行の作法である、即ち獅子を無明に取り行者を法性に取るから能乘所乘冥合一體法無明法性圓融無尋理である、これ行者が獅子に乗るわけになるから明暗一體凡聖不二の標示になる。

脚半



脚半に順逆二峯の修行に依て二種ある、春峯順峯即ち從因至果の修行に於ては黒色の筒脚半を用ゐる形、四形なるは地大阿字を表はす、阿字は胎藏大日の種子、東方因曼荼羅の故に順峯修行に之れを用ゐる、黒色は風大種子、阿字である、入峯の行者阿字の内證に住する義表である、次に脚半の上下に着ける白色の堅

緒は法性不染淨白輪圓の標徳である。上の堅緒は上に交む、これ上求菩提の義下の堅緒は下に交す、これ下化衆生の義である。胎藏は内證門順峯修行の故に順内に違へて之を着す。次に秋峯逆峯即ち從果向因の修行に於ては黒色劔前の脚半を用ゐる形、劔前なるは金剛智斷の義を表はす。即ち八幅輪寶を像る。金剛界は西方果曼荼羅なるを以て逆峯に此の脚半を用ゐる。八結の劔前は八邪の無明を斷し八正直道に歸せしむるの意味、恰かも金輪が能く萬物を摧破するが如く、これを蹴迦と云ふのは輪寶交脚の意味である。金界は外用門逆峯の修行なるを以て之を逆に外に違へて之を着用するのである。

又兩部不二の脚半なるものがある。裏書に次の様に説明してある。胎金不二の脚半あり、謂く其形金界の脚半に違はず。胎藏脚半の如し、是れ則ち胎金兩部不二即一の義なり。夏峯或は世間普通駈路の時之を要す。誠に惟れ非果の行儀入峯修行の目足なり云々と。

(修驗の衣體道具は必ずしも上述のもの丈けに限られたのではない。以上は専ら入峯修行に於て用ゐられるものであつて、日常又は時機に依つてはあらゆる法衣)

法具佛器類は用ゐるのである。殊に天台真言の兩宗には深い關係があるから、兩宗派で用ゐるものは大抵用ゐるので、現今に於ては殆んど變りないまでに兩宗派に接觸して居るのである。これは現在修驗道が宗制上兩宗派に屬して居るから修驗であると同時に、兩宗派の何れかの僧侶であらねばならぬから、殊の外離るべからざる密接の關係の上に立つてゐるのである。

修 驗 道 終

修驗道附録第一

一、本山修驗問答

問 金峯山藏王權現垂跡は何ぞや

答 廿八代安閑天皇の御靈なり繼體天皇の太子にして母は后目子媛尾張連草春女なり乙卯年十二月朔日崩す同十七日河内國齋市郡高屋止陵に葬す後大和國勾金橋の上社を立て勾金橋宮と號す神靈金峯山に至りて金剛藏王三所權現と現はれ崇め奉る。

問 金剛藏王權現の尊形は如何

答 金峯山權現の廣前に於て役の行者權現の尊形を祈りて寫し奉る即ち一面三目二臂にして青黒忿怒形なり毛髮逆亂して頂上に三古冠を戴き右の手に三古杵を持ち拳空に打つ勢をなす左手は劔印を結んで左の脇を押す左の足は寶石を踏み右の足は空中を踏む。

問 藏王權現の本地は何ぞや

答 金剛藏王權現の本地は第一中尊藏王は釋迦如來第二東藏王は千手觀音第三西藏王は彌勒菩薩なりこれを金剛藏王三所權現と云ふ。

問 藏王權現の垂跡は一社にして本地三體とは如何

答 藏王の三體は過去現在未來の三時守護神にして役行者その尊形を大和國勾金橋宮に遷し奉るなり。

問 役小角の誕生は何年なるや

答 人王三十五代舒明天皇六年正月朔日にして大和國葛上郡茅原と云ふ所に生る。

問 役行者の父母は如何

答 父は高賀茂氏間賀介麻呂白取母は渡都岐麻呂の女なり。

問 役行者順峯修行は何れの時始めしや

答 人王三十七代孝德天皇御宇白雉三年十二月晦日行者十九歳にして熊野三所權現に參詣し金峯の檢徑に登り山上に至つて藏王の尊體を拜し當峯守護誓約あり百日にして吉野に出つこれ修驗道順峯の始めなり。

問 然らば逆峯修行は如何

答 同白雉四年七月十六日二十歳にして吉野より入り七十五日にして熊野三所權現に至つて出づ、これ修驗道逆峯修行の始めなり。

問 花供峯に仔細ありや。

答 花供とは蓮花會の峯即ち夏峯なり花とは蓮花なり供とは自身供養の義なり蓮花は果實と同時に開くなり蓮は果なり花は因なり夏峯は則ち因果不二の法儀なるを以て又花供峯と曰ふ。

問 役行者は何人より神道を相傳せるや。

答 天兒屋根尊二十二代の孫大織冠鎌足より神道を役行者に相傳し玉へるなり。

問 修驗道の秘法は何人より相傳ありしや。

答 人王三十九代齊明天皇の白鳳十一戊午年役行者二十五歳の時箕面山に登り瀧穴に入り龍樹菩薩の淨土に於て該秘法相傳あり。

問 役行者大峯修行の度數如何

答 人王四十代天武天皇の朱鳥二年行者六十四歳に至るまで順逆三十三ヶ度な

問 役行者の入滅は何歳なるや。

答 人王四十二代文武天皇の大寶二年六月七日役行者六十九歳にして入滅あり

箕面山の戌亥の角に葬る今往生の峯と云ふこれなり。

問 箕面山を以て山伏の本寺と立つる事如何

答 役行者箕面山に於て龍樹菩薩に遇ひ秘法傳受あり依つて山伏の本寺と立つ。

問 役優婆塞の尊形とは如何

答 役優婆塞とは金胎兩部不二の分身不動明王の直體なり藤葛を衣となし九條の袈裟を着し角帽子を冠り右手に錫杖左手に般若心經を持つ足駄を履き峯中修行の形なり。

問 然らばその兩脇の鬼に仔細ありや。

答 左脇は青色にして口を開き肩に笈を懸け手に水瓶を持つ、これを妙童鬼と云ひ胎藏界にして又義學と號す、右脇は赤色にして口を閉ち左手に斧を持つ、これを禪童鬼と云ひ金剛界にして又義立とも云ふ。

問 大峯八大童子とは如何

答 第一除魔童子

第二護世童子

第三慈悲童子

第四惡除童子

第五劍光童子

第六香精童子

第七檢僧童子

第八虛空童子

除魔は右手に利劍を持ち左手に寶珠を持つ

護世は右手に開敷の蓮花を持ち左手を金剛拳に作り腰に按す

慈悲は右手に利劍を持ち左手に三古を持つ

惡除は右手に鉞を持ち左手金剛拳にして腰に按す

劍光は左右の手を相並べて寶珠を捧ぐ

香精は左右の手を相並べて鉢を捧ぐ

檢僧は右手に寶劍を持ち左手に寶索を持つ

虛空は左右の手を相並べて香爐を持つ

問 大峯香精水に仔細ありや

答 深山は東西これ因果なり故に中央これ不二なり香精童子兩手に一鉢を捧げ此の處を鎮護す故に當所の關伽水を香精水と曰ふなり(豐興曰はく深山灌頂の

深義こゝにあることを思へ)

問 山伏の字義如何

答 日藏上人の傳に曰はく法性真如の山に入りて無明煩惱の敵を降伏すと云々

問 先達の字義は如何

答 先達とは先は規なり達とは通達なり能く先規に通達するが故に先達と云ふなり

問 五人の先達とは如何

答 東方は木を司る故に小木先達と云ふ阿閼如來に當る西方は果の方なるが故に宿先達と云ふ阿彌陀如來に當る南方は火を司る故に柴燈先達と云ふ寶生如來に當る北方は水を司る故に關伽先達と云ふ釋迦如來に當る中央は四方を兼ねる故に峯先達と云ふ當に五方の體なるが故に大日如來に當る

問 年行事の三字に仔細ありや

答 年行事とは年々事を行ふを以て名となすなり事とは何ぞや彼の檀德十二年悉多太子の難行苦行の事を云ふのみ故に修驗行者年々峯中に於て怠なく心に之

を慕ひて躬ら之を行じ以て直ちに世尊所爲の行を表す因つて命じて年行事と云ふなり。

問 山伏道の禮儀とは如何

答 山伏は頭襟結袈裟鈴繫を着し平座に對面の時我より上の山伏には如常一禮して左右の手を劔印になし頭襟の前の兩方の襜に兩手を懸け頭襟を直す如くすべし是れ山伏の一禮なり。

問 三僧祇とは如何

答 一僧祇とは春夏秋冬三峯の修行を云ひ二僧祇とは順峰逆峯華供峯等六個度の修行を経たるを云ひ三僧祇とはこれら三峯九度の修行を卒へたるものを稱す。

問 大越家とは如何

答 大越家とは大峯順逆三十三ヶ度の修行を経たるを曰ふ。

問 未修行の山伏とは如何

答 大峯に一度も入峯したることなき山伏を曰ふ。

問 新客とは如何

答 始めて大峯修行の山伏を新客と云ふ。

問 度衆とは如何

答 度衆とは大峯順逆二ヶ度以上の修行を曰ふ。

問 客僧とは如何

答 客僧とは修験門にあらざる他宗の僧にして大峯修行の列に加はる僧侶を云ふ。

問 聖護院森の熊野は何人の勸請なるや

答 役行者の法流付屬の徒は日本六十餘州に於て別して熊野權現を勸請する舊例ある故に日圓和尚客道附屬の後北白河に熊野三所權現の社を立て三月十五日此の權現を祭る日圓和尚は役行者の正統修験第十祖にして嵯峨天皇の御宇の人なり其墓往時西の京にあり中頃都の内西洞院に移し其所を呼んで大峯圖子と云へり。

問 北白河郷を聖護院村と云ふは如何

答 此所は三井園城寺長吏熊野三山檢校千光院法務大僧正十八世増譽の御領地

三、聖護院宮代々入峰御道筋

七月廿五日卯の刻御出門御發輿御殿より荒神口寺町を上へ今御門西へ北御門より禁裏へ御參内堀町御門より丸太町東へ寺町通り南へ五條橋伏見海道南へ御行列なり、それより○御休京稻荷△御泊宇治三室戸寺御本坊金藏院寺中御下宿此所に七日御逗留御修法あり○御休八月四日長池△御泊奈良此日は南都に御逗留あり春日東寺へ御成り○御休八月六日八木△御泊土田△御泊八月七日吉野一老吉水院御本坊實城寺此所七日御逗留惣入堂二社御社參○御休八月十四日竹林院△御泊安禪是れより山上大峯路なり△御泊八月十五日小篠十六日は御逗留大護摩あり○御休八月十七日とろ川龍泉寺△御泊天河柿坂虎太郎○御休八月十八日洞籠川△御泊小篠五日間御逗留あり天下安全の御修法あり△御泊八月廿四日彌仙△御泊八月廿五日深山此所に一日御逗留△御泊八月廿七日前牛御本坊金輪寺此所に一日御逗留△御泊八月廿八日沼田△御泊八月三十日葛川御本坊長泉寺△御泊九月朔日玉置○御休九月二日切原此所峯中の果にて是れより紀州御領地な

り此所に御茶亭立ち紀州より御役人出づ御馳走——郡奉行二人目附二人與力二人代官一人賄方大庄屋此所より音無川見ゆ紀州様より御舟竹樓丸出づ熊野本宮へ御着△御泊同日本宮竹之坊四日御逗留御馳走人同上△御泊五日新宮六日は御逗留○御休九月七日字具井御茶亭立ち御馳走人——郡奉行一人代官一人賄方一人大庄屋△御泊那智山實實院八日御逗留御瀧詣御馳走人——郡奉行一人目附一人代官一人賄方一人大庄屋○御休九月九日御茶亭立ち御馳走人——郡奉行一人目附一人代官一人賄方一人大庄屋△御泊本宮御宿坊御馳走人右同斷○御休九月十日湯川御馳走人——郡奉行一人代官一人賄方一人大庄屋△御泊近露御馳走人同上○御休九月十一日芝假御茶亭立ち御馳走人同上△御泊田邊田島海藏寺御馳走同上○御休九月十二日印南印定寺御馳走同上御泊橋木御馳走同上△御泊九月十三日小松原御馳走同上△御泊九月十四日岩屋御馳走同上○御休九月十五日紀三井寺御馳走同上△御泊紀州和歌雲蓋院御馳走同上△御泊九月十六日伽陀御馳走同上○御休九月十七日山口假御茶亭立ち御馳走同上△御泊貝塚○御休九月十八日堺△御泊大阪○御休(牧方)○御休(伏見)——當日御入京

(以上實曆板の行列記に據る)

四、神變大菩薩御影供和讃

歸命頂禮神變尊
 大日如來の化身にて
 大悲利生の智門より
 七生までに化現して
 願力自在にましまして
 金杵を瑞夢に託してぞ
 舒明天皇六年の
 大和の國の葛城の
 異香を薫じ降誕の
 佛天影向ましましてり
 金剛堅固の相現す

仰ひで本地を尋ねれば
 密號法喜菩薩なり
 跡を此土にたれ玉ひ
 末世の衆生を濟度せり
 生を役氏に受たまひ
 すでに月滿そのときは
 正月元旦寅の時
 上の郡の茅原にて
 庭には紫雲たなびきて
 浴みせずしてきよらかに
 御名をば役の小角と

幼稚の戯ふれ餘所にして
 草莖結んで堂をたて
 泥土に佛の像をなし
 一持密咒の本誓を
 供華焼香息たらず
 さて御國の神の道
 また外典をも學ばれて
 夫より後は大峯や
 三十餘霜のそのあひだ
 藤や葛を衣とし
 孔雀王の法を修し
 利益衆生のそのために
 遠き峯より野原まで
 名山靈區を經行し

たゞ佛乘に志ざし
 沙石を聚めて塔をくみ
 自然智無師智ましまして
 信じて日毎に十萬遍
 恭敬禮拜なし玉ふ
 熊野の神に感得し
 深き旨をぞ窮めつゝ
 葛城山に入せられ
 窟の中にすみたまひ
 木の實を拾ふて食にあて
 五色の雲に駕したまひ
 深き谷また高き山
 道なき所をふみひらき
 神變加持を施して

至り給はぬ所なく
 しかのみならず大峯に
 藏王權現出現し
 箕面に聖天辨才天
 あらゆる佛天影現し
 またある時は天にとび
 通力自在にましまして
 されば權化の方便に
 しばし叙慮をおとろかし
 かくてほどなき勅免は
 歸洛の後はいやましに
 攝州箕面の瀧窟に
 龍樹薩埵を敬禮し
 祕密の印璽を禀たまひ

自他の化益も日にあつし
 鎮護の神を祈りてぞ
 八大童子圍繞せり
 葛城三寶大荒神
 七童子恭敬しつ
 形を隠し空に坐し
 衆生利益を限りなき
 無失の譏訴を受け玉ひ
 遠流の宣旨くたりける
 神通利生のしるしにて
 苦修練行の功をつみ
 入らせ玉ひてまのあた
 鐵塔受法灌頂し
 胎金兩部を合行し

至心念誦五字陀羅尼
 十界一如修行門
 修驗の道を我朝に
 大悲の方便やまざれど
 雙林滅度に擬したまひ
 箕利に天上したまひき
 なを盛んなる光りより
 勅使を御堂に賜はりて
 勅會の儀式をごそかに
 歸依渴仰の輩は
 威徳のほどは中々に
 値遇の有縁あさからず
 忘れがたきは御恩徳
 唯願ば神變尊

末世の劣機に應じてぞ
 即身即佛頓悟の法
 弘め玉ふぞありがたき
 化縁を催す夕べには
 天年七十歳にして
 されどくちせぬ洪徳の
 千百年にあたりてぞ
 靈號は神變大菩薩
 受けさせたまふ尊とさよ
 福徳果報計りなし
 心言も及ばれず
 心にかけてつかのまも
 何れの世にか報謝せん
 神力加持を捨ずして

我と衆生ともろともに

二世の悉地を備て玉へ

五、神變大菩薩行狀和讃

歸命神變大菩薩

大日如來の化身にて

昔し印度に在しては

稟させ玉ひてその名をば

支那で香積仙人と

大悲の誓願深ければ

七生までに化現して

願力自在にましまして

父は高賀茂間賀介磨

或夜母公御夢に

影向あらせ金色の

仰ひて行狀讃すれば

修驗の法門元祖なり

釋迦牟尼佛の心印を

迦葉尊者と稱せられ

誕して仙法説れたり

跡を此土に垂れたまひ

大峯修行し玉へき

姓は賀茂の役氏にて

母は同氏渡都岐比賣

大日如來の空中に

獨站を御掌の上に居

御告げあらせて言く

智慧の男子を授んと

空より降り御口の

御身の重きことを知る

光を放ちさまさまの

既に月満つそのときは

あたらせ玉ふ舒明帝

正月元旦寅のとき

上の郡の茅原にて

庭には紫雲たなびきて

生れながらに浴みせず

光を放たれ初聲に

唱へ玉ふぞ妙不思議

手を拍奇異の思ひなす

衆生濟度のそのために

のたまひければ彼獨古

中ちにぞ入ると御覽じて

それよりしては御身には

奇特をあらはし玉ひけり

人王三十五代にぞ

第六年の甲午

大和の國の葛城の

異香を薫じ誕生の

佛天影向加護をたれ

その御體はあざやかに

如我昔所願等の文

これを見聞する人は

初めの御名は金杵丸

次には役の小角と
役の行者と稱せられ
既に三歳に及ぬれば
四五歳に及おんときは
たゞ佛乘にこころざし
砂石を聚めて塔をくみ
これを安置し香を燒き
御年七つのそのときに
密乗感悟し玉へて
不動の誓ひを仰がれて
それより日課十萬遍
御年十三なりしより
御衣を霑すこともなく
暑さに涼しく寒さにも

又その後改めて
少なき時より利根にて
初めて文字を書き玉ひ
幼稚の戯れ他にして
草莖結んで堂をたて
泥土に佛の像を作し
散花禮拜し玉へき
自然智無師智得させられ
梵字を書せその上に
始めて慈救の咒誦し玉ひ
行は六度を修し玉ふ
歩行の間雨ふれと
御身に風も中らずと
猶温を得玉へて

御足に蠢く蟲ふます
學べること博ふして
一を聞ては十を知り
さて我國の神の道
鎌足公より傳へうけ
十六歳のおんときに
伊駒ヶ嶽にすまひける
夫の名をば赤眼と
五人の子供持ちけるが
三をば鬼助四は鬼虎と
わけて鬼彦は愛ふかく
人を殺し害へる
菩薩はこれを憐まれ
二鬼の愛する鬼彦をぞ

さまざま奇特をあらはされ
頗る世人に異なれり
内外二典の理を究め
天津兒屋根の神の裔
天文地理に通せられ
大和平郡の郡なる
夫婦の鬼がありけるに
婦のその名を黄口とて
一ちをば鬼一二をば鬼治
五をば鬼彦といひ名け
世の産業に異なりて
その數かぎり知れざれば
化度の方便回らされ
咒力を以てかくさるゝ

二鬼はたまたま驚きて
 勢ひなして尋ねれど
 それゆへ夫婦の鬼共は
 拜して願ひけるやうは
 未だえざりしことなれば
 示し玉へと降参す
 我等が教へに従がはば
 仰のあれば鬼共は
 尊者の仰に順がはん
 しからは人を殺すなよ
 之れをば許したび玉へ
 菩薩は重て言く
 必ず約をたがはざれ
 惡魔降伏し玉ふは

天に昇り地にも入る
 終に見出すことをゑす
 菩薩のもとに到りてぞ
 我が子を失ひ竟ぬれど
 御慈悲をたれて居り所
 菩薩は告て言く
 便ち愛子を與んと
 我が子をえさせ玉ふなら
 菩薩は猶も教化して
 鬼ども色を變らかし
 我等なにをか食にせん
 粟を食して飢にあて
 虚空に御佛在すぞや
 汝等人を惱ますに

すこしも違ふことぞなき
 必ず汝等害せん
 菩薩に白して言はく
 眞ば我等をも
 今よりしての其後は
 尊者を師とし仕んと
 喜哉善哉我れ方に
 授くべしとの玉ひて
 すなはち授け玉へにき
 常に唱ひて怠らず
 人となりぬることなれば
 善惡生死の表示にて
 或は前鬼を善童と
 授け玉へて使はしめ

我語に違ふことあらば
 二鬼は喜び涙ぐみ
 廣大慈悲の御誓ひ
 御濟度あそばし玉はらば
 悪しき心を翻へし
 菩薩は告て言く
 今汝等にこの秘文
 見我身者等の文
 二鬼は秘文を授りて
 惡を斷じて善を修し
 菩薩は二鬼の名をかへて
 夫を前鬼婦を後鬼と
 後鬼のその名を妙童と
 その處には精舎をたて

鬼取寺とこそは名けたり
 大和葛らの上み郡
 微妙の音を聞玉ひ
 法喜菩薩の淨刹に
 三昧發得し玉へき
 法喜菩薩と現じさせ
 この山にこそ堂を建て
 茅の庵りを結ばしめ
 今の行者坊なりき
 攝州豊島の郡なる
 練行をこたり玉はねば
 辨財尊天現じさせ
 十五童子も誦出して
 念願満足し玉へば

さて亦同じ御年に
 葛城金剛山に入り
 聲を尋ねて行れてぞ
 到らせ玉ひて法を聞き
 花嚴會上の誓ひにて
 衆生利益のそのために
 法喜菩薩を安置して
 恭敬供養すその跡は
 十七歳のおんときに
 箕面山に入らせられ
 大聖歡喜雙身天
 秘印秘明を受玉ひ
 俱に擁護を得させられ
 小社を作り堂を建て

かの尊等を安置せり
 紀の國牟漏の郡なる
 證誠殿を拜されて
 兩部習合その秘奧
 神佛一致の理を悟り
 遺風を慕ひ玉ひてぞ
 人跡絶たる谷や峯
 薪を拾ひ食き設け
 不動明王孔雀尊
 大誓願を發されて
 我れ末世のその中に
 衆生を利益すべければ
 形を呈し玉はれと
 九萬八千神み祇みは

十有九歳の御ときに
 熊野の山へ駈入せ
 持念觀行し玉へば
 みな悉く感得し
 しかのみならず釋尊の
 大峯山に入せられ
 菓を探せ水を汲み
 深禪窟に座せられて
 二尊の法を修し玉ひ
 冥衆に告て言く
 この山にてぞ一切の
 天衆地類ことごとく
 誓願いまたをはらぬに
 天より降臨なしたまひ

三世の諸佛も隨喜して
童子も地より出現し
小笹山上等の祕所
難行苦行し玉ひて
これぞ順峯の權輿なり
吉野の山より駈入らせ
終に熊野へ駈け出る
金峯吉野と熊野とは
惣名大峯山と云ふ
羊石の五部の諸尊等
佛蓮金の三部なる
鎮座ましまし餘の峯に
かくこそ名け玉ふとぞ
兩部の諸尊の御淨利

三十六所の金剛の
哀愍加護を得玉へて
一百日のそのあひだ
大和吉野へ駈け出る
二十歳なるおんときに
七十五日修行して
これを逆峯と名けたる
その名を異にはしつれとも
いはく佛蓮金寶と
峯々毎とに安鎮し
諸尊聖衆は嶽毎に
勝れて冠きそのゆへに
この山胎藏金剛の
本有自然の曼茶にて

佛天鎮護の靈地なり
家を棄させ重ねてぞ
抖擻の功を積しかば
七大童子涌出して
供養雲海みちみてり
埋め玉ひて序品をば
二十八品尾りをば
故へに一乗峯といふ
名山靈區を經行し
藤や葛を衣とし
御首に卍字の形なる
おん身に簪を着なされて
右に錫杖策せられ
左に念珠を持せられ

三十二歳のおんときに
葛城山に入らせられ
胎藏權現影現し
前後に圍繞し玉へて
又法華經を此の峯に
伽陀の窟に納めさせ
そとばの峯に埋めらる
三十餘霜がそのあひだ
巖窟の中に住み玉ひ
木の實を拾ふて食にあて
長さ八尺の頭襟めし
九條の袈裟を掛玉ひ
又は獨結を執り玉ひ
或は心經持ち玉ひ

開口念誦の勢を作し
 鐵の履を履せられ
 大磐石に安住し
 五色の雲に駕し玉ひ
 深き谷又高き山
 道なき所をふみひらき
 形をかくし空に座し
 意の如く自在にて
 自他の化益も日にあつし
 密教求法のそのために
 誓願發し玉ふれば
 天にたなびき御自身の
 自ら奇異の思ひなし
 終に箕面の靈地なる

定惠の兩脛露され
 半行半座の威儀を具し
 孔雀王の法を修し
 仙府に遊び玉へてぞ
 遠き峯より野原まで
 又ある時は天に飛び
 神變加持を施こされ
 到り玉はぬ所なく
 三十六の御年に
 又も葛城山に入り
 あるとき五色の瑞光が
 頂き照すことあれば
 光を追て行せられ
 一十五丈の瀧口に

到らせ觀念し玉へば
 かの瀧窟に入せられ
 到らせ玉へてまのあたり
 鐵塔受法灌頂し
 みな悉く稟承す
 賜はり歡喜信受して
 途に淨土を辭して後ち
 巖石を平らげ堂をたて
 箕面寺とは名けたり
 金峯の山に入せられ
 修練苦行なし玉ひ
 涌出が嶽にのぼられて
 瑞相顯したまはれと
 大恩教主の釋迦如來

大聖不動の教示にて
 龍樹菩薩之淨刹に
 聖者に値遇し上り
 大日如來の密法を
 又その上に菩薩號
 恭敬禮拜なしたまひ
 その地を定め刈り拂ひ
 龍樹菩薩を安置して
 御年五十のおんときに
 一千日のそのあひだ
 五十二歳のおんときに
 鎮護國家の靈神の
 祈り玉へるそのときに
 忽ち出現し玉へば

菩薩は歎き白すらく
 末法衆生を度せんこと
 敬禮撥遣し玉へば
 降臨影向し玉へば
 又も撥遣し玉へば
 彌勒慈尊の影現す
 斯様に大悲のおんすがた
 至心に祈り深くして
 現じ玉へと念すれば
 三世擁護の釋迦千手
 大勢忿怒の尊形で
 八大童子も涌出せり
 これぞ末世に相應の
 一刀三禮なし玉ひ

柔和忍辱御すがた
 争でか舎はせ玉はんと
 次には千手觀世音
 菩薩はなほよからずと
 三度に及べるそのときに
 菩薩重ねて玉まふは
 惡世の化度に應せずと
 庶幾は降魔の相
 磐石にはかに震動し
 彌勒の三尊跡をたれ
 金剛藏王出現し
 菩薩は歡喜渴仰す
 守護神なりと讚歎し
 藏王尊を作られて

堂を建てぞ安置せり
 又も葛城山に修す
 紫雲たなびきけるゆへに
 かしこの峯にもなりぬれば
 祕印祕明を受け玉ふ
 六十四ツの御年に
 三十三ヶ度修せられき
 六十七の御年に
 惡逆邪念を含みにて
 しばし歎慮おとろかし
 巳亥の年五月にぞ
 遠流の宣旨下るにも
 三年か間だかの地にて
 衆生を化度し玉ひにき

五十五歳のおんときに
 そのときかの峯東北に
 光りを追ふて飛行れ
 三寶荒神示現して
 凡そ順逆峯入りは
 至らせ玉へるそのうちに
 しかるに權化の方便に
 韓國連廣足が
 無失の譚訴を受け玉ひ
 文武天皇第三の
 伊豆の國なる大島に
 思へばこれも朝恩と
 通力自在を顯はされ
 かくて幾程なかりきに

大寶元の丑のとし
 勅免得玉ひ歸落して
 修行は意に任せよと
 大峯山に攀躋り
 そのため千基の石塔を
 供養誓願し玉へば
 覆ひ聳へてぞ隠れにき
 この塔こそは當來の
 顯し玉ふことぞなき
 笑面に錫を飛されて
 至心念誦五字陀羅尼
 五字の眞言所依として
 即身即佛顯され
 修驗の道を我朝に

春二月にいたりてぞ
 歸依の供養を受玉ひ
 猶も勅免蒙らせ
 父母の重恩報せんが
 深山にこそは起られて
 即ち塔に雲霧が
 これ石塔の始めなり
 慈尊の出世にあらざれば
 かくての後は一向に
 胎金兩部を合行し
 末世の劣機に應じてぞ
 十界一如の門開き
 眞俗不二の立義なる
 普く弘め玉へるは

鎮護國家の祈りにて
 萬世守護の民を利し
 大悲の方便やまざれど
 雙林滅度に擬し玉ひ
 卯の年六月七日にぞ
 御記文唱ひさせ玉ひ
 されどくちせぬ洪徳の
 千百年にあたりてぞ
 春三月の七日には
 謚號は神變大菩薩
 受させ玉ふ尊とさよ
 福徳果報はかりなき
 心詞に及ばれず
 心にかけてつかのまも

現當二世を安樂に
 既に行願みちみり
 化縁を催す夕べには
 大寶三の癸の
 天年七十一歳にて
 箕利に天上し玉へき
 なほ盛なる光より
 寛政十一庚申
 勅使を箕利にたまはりて
 勅會の儀式嚴そかに
 歸依渴仰のともがらは
 威徳のほとはなかなかに
 値遇の有縁あさからず
 忘れがたきは御恩徳

何れの世にか報謝せん
神力加持を捨ずして
雲に施し玉はりて
霞にこそは被むらせ
二世所願を満て玉へ

積首神變大菩薩
大慈大悲を一宗の
無邊の利益を萬邦の
我と衆生と諸共に
南無神變大菩薩

終り

修驗道附録第二

一、大峰密法 大採燈護摩供作法野法

想入道修行(各行列して靈地に入ること一日一度なり)

道行次第

先法螺、闍伽、斧、笈

金剛位人、行者、衆僧

次靈地堂内に至り

三禮

一切恭敬文

次本覺讚

次心經

次諸天真言

出壇

宿之次第

大宿

二宿

三宿

(大宿より時案内出づ)

(大僧は高位、護摩壇正面に出居す)

(各出宿)

堂内

(堂を出る時小木役法螺を吹く、三音半)

一唱

三卷

可任意

導師

護摩師

衆僧

三禮

(壇内に小木役一人居て法螺を吹くこと前の如し)

(壇内に三度堂内に三度合せて六度壇内より導師笈を掛け堂に至り壇前にて行者に傳ふ導師は壇内に入り行者衆僧共に堂内に至り又壇に至り衆僧一人に傳ふ衆僧堂に至り衆僧又壇に入て座す以上九度)

次小木役

加持

各二人小木を取り先に向て一禮入込て後又向へ一禮小木を渡すこと以上三度壇の左の方に置く

次導師法

衣加持印

行者祈願文誦す

普印

次小木役「火」を入る左右に分れて付く口傳

行者高聲 四大和合身の文を誦す

次山身印一印

神變大菩薩觀念

次八葉卯

唵誠尼都尼吽發吒

次金剛合掌

唵縛羅陀尼吽

次普印

舍利禮

行者護摩木を切る時太刀を抜くに無名指にて目釘の一方に卍を書き又一方に卐を書く

次太刀を振るに口傳、*アヒマヒ* と唱ふ。

次護摩木切るに *スミヨクヨスミ* と唱ふ。

三抱 一座也

次又木傳 取る時三古印にして三所加持

次火扇 上テと書き裏ウラと書く口傳

導師衆僧懺法誦す

木祕密之口傳

長七尺

大壇 床木 一丈二尺

小壇 九尺

爐木 四方共に九本宛 以上三十六本也

四方同 七本宛 以上二十八本也

四方角繩を掛けるに口傳あり

護摩木 一尺八寸なり

夫れ修驗探燈は五佛の三摩地に住す東方阿閼の木を西方彌陀の劍を以て切り中央大日の大地に積み南方寶性の火にて之を焼き北方釋迦の水を以て之を消すと想へ云々

大峰護摩意趣文(現在に趣を異にす)

抑大峰護摩之事 今上皇帝依御施主寶祚延長國土安穩之可抽精誠之旨依三山

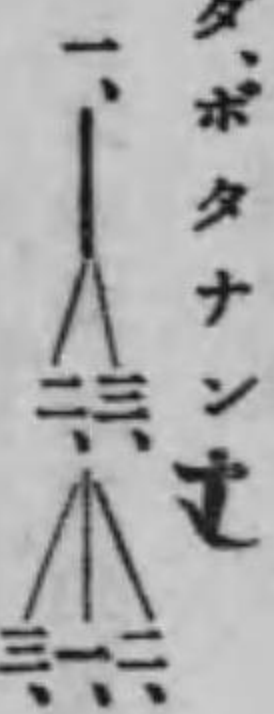
檢校宮殿命各抽丹精可修行者也仍而志趣如件

二、大峰祕密底壇護摩法

先靜慮印

觀想自心、心蓮台上有、**魂**字反成淨滿月輪、其中有、**魂**字反成羯摩輪、又反成大日如來入普現色身三昧成、大鉢反成釋迦牟尼如來左胸現、**魂**字成寶塔、轉成慈氏尊、右胸現、**魂**字反成觀世音千手、從果向因、故三尊轉合成一、**魂**字反成金剛藏王、身青黑色、而右第一手蓮花、第二手三古杵、第三手鉞斧、左第一手寶珠、第二手寶鉤、第三手施無畏印也、微笑如天女形、說諸祕密、度諸衆生、又入四攝三昧、一面二臂、三目、頂上載三古冠、身青黑色、右手持三古杵、舉肩上、爲打物勢、左手劍形、押脇下降、伏、天地魔障、擁護、國土、放五大色光、度五趣衆生、八大金剛童子、四方恭敬圍繞、即藏王心中發起、大智光焰、燒諸妄執、

若有事木事火



無所不至印 四大和合身 骨肉及手足 加薪盡火滅 皆共入佛地

次靜慮印

觀想以世界一圍爲道場以大地爲爐壇以風雲爲氣息以雨露漉沙界潤澤是遍法界護摩觀也

久出定

次火天印 有漏火天召居心蓮台上

火天呪

百八反

次靜慮印

觀想有現字成金峰山山上有系字反成三古杵中杵釋迦兩古千手慈氏之三昧耶形杵反成金剛藏王儀形如前心中端發一系字其性柔軟強剛風息動轉未曾見空舒廣遍法界反成不動明王右手持劍左手取索色金色放金色光焰消融天魔外道於蓮花石半跏座嚴然住

慈救咒

百八反

次無所不至印 至心發願 心內心外 不斷梵燒 消除天災 地妖障難 金剛藏王 八大金剛 反成大聖 不動明王 心外火天 成焰梵燒 成就圓滿

次金剛合掌 (二中二頭交立二大開)

ランアボキヤ、マニ、アラタンナウ

次掬心上業報投虛空前印更開 廣々々々 口傳

次掬虛空界投心蓮上前印更開 廣々々々 口傳

次靜慮印 觀想遍法界不動尊滅光歸步身本有無碍身反成金剛藏王身尊威焰熾盛梵燒有無漏業障災難了

次內縛頭指立 ナウマクサンマンドー 礼

次外縛二中立 ナウマクサンマンドー 礼

次前印合四指端如無所不至印

ランバサラ、クシヤ、アラジヤラ、タンナウ、バンタラクソワカ

次靜慮印 觀想有無漏本尊反成如意寶珠

次金剛合掌 (二頭二大)

ナウマクサンマンドー 禮

(有殘木可事火)

次靜慮印 觀念舉體實成舍利寶珠也寶珠即是金峰山金峰山即藏王菩薩也
久而出定

以上

三、修驗理護摩私記

先護身法等如常

次法界定印

次字觀照離生死之流水
次字理水消曠恚之猛火
次字智火燒愚痴之不淨
次字息風拂貪欲之妄塵
次字大空斷人品之執惡
如是安住六大理觀法爾四曼之佛體四儀自在之法樂也是則自性心壇內護摩

生死瑜伽祕勝藥也

次酒淨

次加持供養

次普禮印言

次積木

次大金剛輪印言

次普供養並三力偈

次祈願金二丁



取珠呂

令法久住利益人天護持佛子等

次三身說法印言

外五古印

智拳印

無所不至印

附錄第三章 修驗理護摩私記

次四明印言 拍掌 普禮

次護摩觀 法界定印

想修驗焚燒者以法界為道場以虛空為爐坦以身口意為限量以音聲為真言以智慧為火體以印契為事相以妄執為乳木以浮報為香藥以等覺為相應以法身為如來最正覺道菩提心也將今以火天為口以宿曜為身以本尊為意以諸尊為毛乳以普世天為兩足如是觀了不用事相為利他之要

次地結

次四方結

次振鈴

ॐ वसुधैव कुटुम्बकम् 安腰

ॐ वसुधैव कुटुम्बकम् 面附

耳五胸三領二

次燒薪 其

次酒杖 用一尺八寸散杖洒水器三度

ॐ वसुधैव कुटुम्बकम् 酒水三度

次金剛合掌

以鍍字淨水洗浴煩惱身

五德顯現智心諸佛圓滿

次投花 四八反 慈救咒

次金剛合掌

四大和合身骨肉及手足

如薪盡火滅皆俱入佛地

次盛火 至爐中

想此花入火中成花座

次扇火 右手上

扇上有字成風輪

次住五佛三摩地 法界定印

東方阿閼木，以西方彌陀，金斬之，置中央大日，大地以南方寶生，火燒之，酒北方釋迦之水，消滅。

次觀佛 金剛合掌 三度

3 0 0 0 0 0

次覽字觀 3 7 7 7 7

次不動四種印言

見，我身者，發善提心， 索印

聞，我名者，斷惡修善， 鞘印

聽，我說者，得大智慧， 智拳印

知，我心者，即身加持， 無所不至印

次芥子 法界定印 七所度

3 0 0 0 0

想成無量金剛杵，遍滿十方世界，供養三寶，諸天亦遍六道四生，轉自他頂上，摧破曠

悲業煩惱，一切怨結，知解。

次投粳米 法界定印 3 0 0 0 0 七反

想成無量如意寶珠，遍滿十方世界，供養三寶，諸天亦遍自他頂上，亦轉六道四生，滅除貪欲業煩惱，獲得榮盛富貴延命報。

次胡麻 法界定印 3 0 0 0 0 七反

想成無量光明輪，遍滿十方世界，供養三寶，諸天亦遍六道四生，轉自他頂上，照融愚痴業煩惱，一切災難，消滅。

次投合物 法界定印 3 0 0 0 0 七反

斷三妄執，六根穢顯，三學圓滿，實相故斷三妄執，六根穢，自性清淨，畢竟空寂也。其體本不生，故此妄執所生，一切煩惱，果皆空寂，無有真實，而一切諸法，本不生，故羅四方走，一切煩惱，可燒也。

次金剛網

次火院

次本覺讚 八印明

歸命本覺心法身

普印

常住妙法心蓮臺

八葉印

本來具足三身德

外五古印

三十七尊住心城

智拳印

普門塵數諸三昧

定印

遠離因果法然具

無所不至印

無邊德海本圓滿

外縛印

還我頂禮心諸佛

內縛印

次五大願 金剛合掌

煩惱無邊誓願斷 福智無邊誓願集

萬行無邊誓願修 法門無邊誓願學

明王無邊誓願事

次獨古印 火界呪

次鈔印 慈救呪

次外五古印 小呪

次不動丁水祕極印明口傳

次無所不至印口傳

次丁水呪

次慈救呪

不動九界迷妄凡體示當相即道法體也

次念誦 佛眼二十一反、兩部二十一反、三天二十一反、諸天二十一反、

次法界定印

想心月輪上有_レ字_レ因業不可得也_レ因業不可得_レ故果位又不可得_レ故佛界衆生界無

二無別平等也_レ智身尊無有二色_レ相莊嚴皆俱等集會_レ旁屬自圓饒住於圓寂法界身

福德智惠大精進現世同本尊身

次後鈴 無并

次八葉印

自性心蓮内護摩道場

本覺法身本有如來

法界體性無差別

次解界火院、四明、拍掌、回向、三部等、普禮 出堂。

(因に記す、修驗護摩法に多種多樣あり本山方には此外探燈大護摩供次第に若王子方、住心院方あり探燈護摩御次第あり、柱源神法護摩記あり宿探燈護摩供次第あり、又修驗道流、修驗三昧流、修驗法曼流等の護摩法あり、室内道場に於ては専ら柱源護摩法を修すと雖も現今天臺に屬するものは三井流に據り眞言に屬するものは報恩流其他に據るもの多し要するに何れも皆大同小異なり)

四、不動金縛祕密法

先護身法如常 次被甲印 縛賊咒七反

ギヤタカタンギヤタ、ガコンイガタ、ジウイゲガタ

次索印 花

見我身者 發菩提心 聞我名者 斷惡修善 聽我說者 得大智慧 知我心者 卽身加持

次轉法輪印 ヲン、シキラ、サタバヤ、ウンタラタ七反

次如來拳印 利劔印 慈救呪七反

次根本内縛印 頭指風背合大指並押ス

右大指 右頭指 順逆一通宛

左頭指 左大指 合三反口傳

觀想、不動行者縛諸童子、願申明王行者、不解限不可解

次歌云 カンマンヤ、タラタノナワヲ、ウチカケテ、シバリ トムムル、アピラウン

ケン

解縛大事 内縛印

ケンギヤキ、ギヤキ、サルバビキナン、ウンタラタ、カンマン、大指ヨリ解クベシ

以上

五、金縛秘法

先護身法如常

次五大尊印

東方降三世明王 南方軍荼利夜叉明王 西方大威德明王 北方金剛夜叉明王 中央大聖不動明王 口傳

惡靈死靈カラメトリ給ヘカラメトリ給ハズンバ明王ノ不覺之ニスクベカラズ 三反

次兩刀印 ランバク / エイソワカ

次請至印 ランバンカエイソワカ

次三摩耶印 八葉印口傳

童子シメヨ / シメズンバユルスベカラズ

ランビシ / カラ / ビシメイビキナヤソワカ 三反

次智拳印

年ヲヘテ身ヲフルサトノアラミサキツナキトメケンシタツマノツマ 三反

次内縛印 オンアビラウンケンソワカ 三反

天地ノ間ニ廣クセキラナス萬物一體一印ニ封ズ

ナウマクサンマンダバサラダンカン 三反

次轉法輪印

童子シメヨ / シメズンバユルスベカラズ

オンビシ / カラ / ビシメイビキナヤソワカ 三反

解縛之大事 口傳

ナウマクサンマンダタラタアボキヤセシヤナ

ウンタラマヤタラマヤウンタラタカンマン 三反

以上

(因に記す、金縛秘法は多種多様其法幾十種あり)

六、不動尊如影隨形密印

索印
刀鞘印
智拳印
無所不至印
四字印
外五股印

見我身者發菩提心
聞我名者斷惡修善
聽我說者得大智慧
知我心者即身成佛

七、金色不動明王所受兩個三身祕印

法身 二手內縛二水各握二地二空押二水甲二火二風各々開立

真言一字明

口云、內縛、佛心遍法界、月輪也、二水、大悲住、本不生際、地、故未彰、外相、二空押之、大空法界智也、二火、二風、常樂我淨、四德涅槃也、謂、二火、樂淨、二德、二風、常我、二德思之、應知、**咒**字本、因果即、六大也
報身 二手劔印交腕抱胸、右左外

真言慈救呪

口云、報身、智故、用劔印、以右爲外、爲智爲表、故左、三昧鞘、故爲內也、真言可知、應身 如胎軌、中、迦樓羅印、謂、二手申散五指、以右空交左空、如鳥嘴形、自餘、八指、如兩翼、翅之勢也

真言火界呪

口云、是則迦樓羅炎印、故用火界、明也、不動應身入生死、大海、噉食、煩惱、毒龍、猶如金嘴鳥、故現迦樓羅炎也、或圓炎之中、書九金翅鳥嘴也、是表、食盡九地九界、煩惱也、
(因に記す、明王念誦の秘法次第は修驗道に於ても東密台密に於ても其種類甚だ多し) 以上

八、五股兩旦兩部之秘歌

そのまの

うたひしを

むすかて

あつれしを

みにはなりけり



修驗道附錄終

光	光	光
光	光	光
光	光	光
光	光	光
以上	光	光

修驗道

一六四

終